





紀伊國名所圖會三編卷之五

高野山之部中目錄

大門

畜狗

西院谷

坊舎

辨財天祠

壇場

中門

御影堂

孔雀堂

鐘樓

七株靈木

地名

山上十樂

後川辨財天社

愛宕權現祠

金堂

三鈷松

新御塔

閼伽井

飯糰の芝

内外八葉峯

時候

來迎堂

大塔

鐘樓

西塔

龍臥洞

愛染堂

禁止

大湯屋

灌頂堂

準胝堂

丹生高野兩大明神社

六角堂

盥漱盤

大會堂

三昧堂西行

東塔

蓮池

南谷

坊舍七十

勸學院勸使門

寶庫鐘樓

遍照峰

虎ヶ峰

地藏堂

大師堂

谷上

坊舍六十

穀屋

一滴不動尊

大日堂鐘樓

嶽辨財天社

本中院谷

坊舍十四

瑜祇塔

蛇原

六時鐘樓

旦過堂

荒神社

興山寺東照宮

御供所一切經藏

一心院谷

坊舍二十

金輪塔

不動堂鐘

心字池

五之室谷

坊舍三十七

大徳院御宮

御靈屋御先祖堂

大師堂

極樂堂

首途辨財天

光臺院多室塔

千手院谷

坊舍四十八

千手觀音堂

萬日堂

青面金剛堂

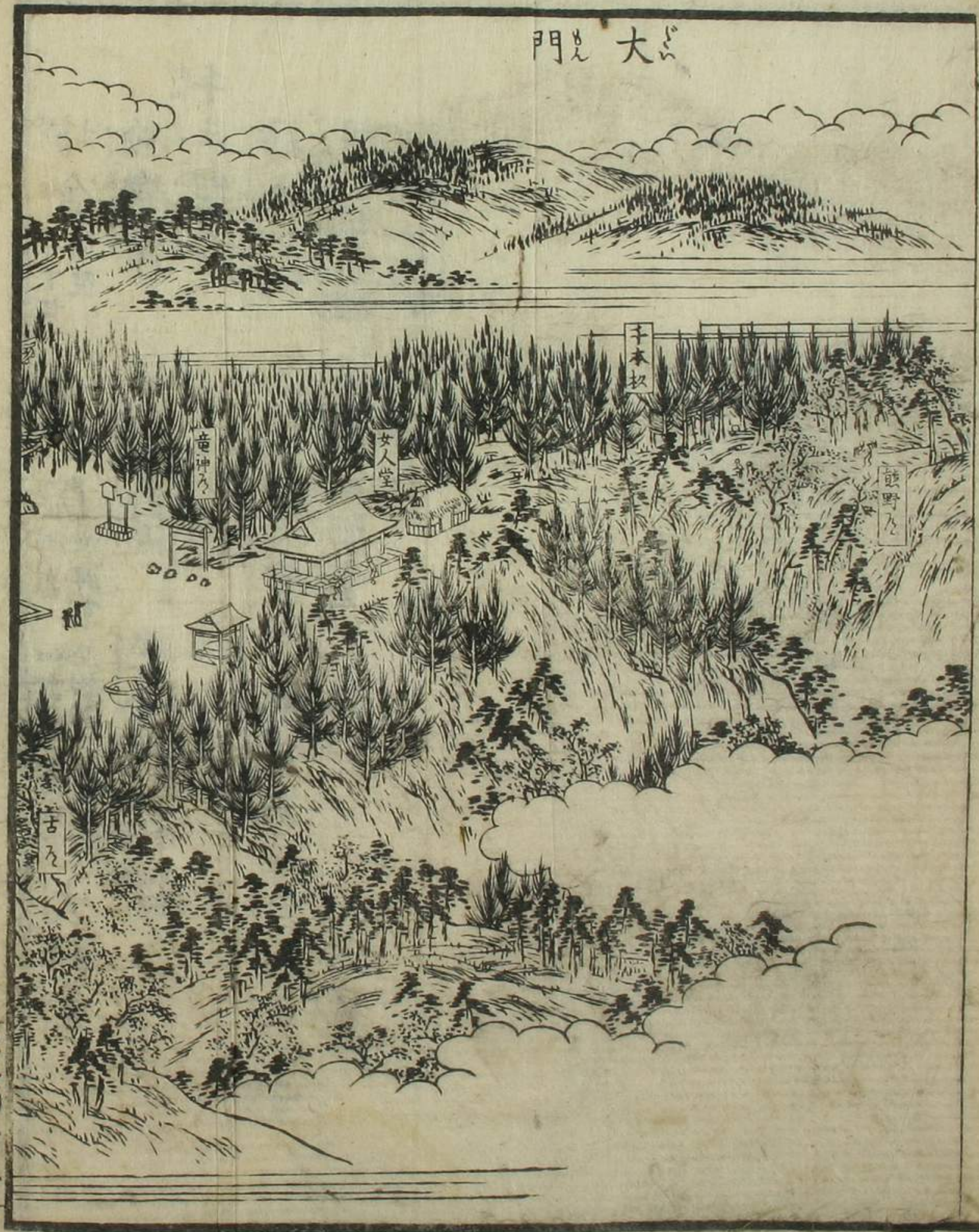
熊野權現社

合躰不動堂

秘井

天滿宮

千手院橋



大門西に向ひて建つ

○金剛力士佛師康意の作

當山の惣門ふして銅甕瓦高き丈十丈餘雲外の岫小湧出

先法界の莊と現と希詣の飛生此小至りて漸攀踏

の疲と忘ま始結構の大なるを驚歎を往昔大師花表

と建く西方の門をかくるを古の門地ハ今ハ門を寛喜二年

改め接門とす建長二年法性寺殿下忠道公小書

して遍額と下させまふを類朽瘡けらふ及びく更り

九條殿下光明峯寺道家公の真翰と懸し小元禄元年

祝融氏の災ありて患集土せりを以て同十三年より

經始して寶永二年小落慶す即今存する所と云ふなり

是より内と山上とを伽藍坊舎透間もななく互及びり

○銅像觀音大門の傍あり申長一丈二尺明和九年江戸祝融氏の災ありて死に許多かりを爲す建之

阿遮磴道幾盤回客子躋攀遠近來一八凌霄翠峰香二

紀三編五ノ三

千飛棟玉樓閣洞中龍卧雲烟黒山上仙遊冰雪堆欲照  
蒼顏窺石鏡林藜時復倚高臺

木村晴孝

翠壁丹崖自嶮巖攀來平坦最堪奇靈區互矣稱高野密  
教儼然闢大基二犬導祥芟數日三銘示瑞栴松時儻非

世帝歸依篤那得布金長若斯

地名

西院谷榎川 南谷照開 谷上林中

小田原谷西光院谷 上壇實相院谷 淨土院谷

屋谷向壇 往生院谷往生峯 西谷北谷 蓮華谷

室幢院谷荅折谷 清淨心院谷 一心院谷 五之室

千手院谷六坊小路

内外

八葉峰大塔の四方四隅に遠なる峯を以ての八葉といひ壇場奥院の外

姑射山 摩尼山 楊柳山 轉軸山 小塔峯 金剛峯  
 山王峯 遍照峯 虎峰 劍峰 小塔峯 神應峯 山王峯 今來峯 遍照峯

禁止 當山七里 結東の内 騎魅暴敷の故人民 禁山 琵琶峯 依背制可停止之而刺  
 寄事於金髮何不遠具慮乎永可禁過之也 智真一何の二人より起り

○禁女人 堂の爲に不動坂口女人

○禁管絃 僧尼令々も思ふえり當山を禁の嚴がり奉文永八年の置文ふ  
 鳳笙龍笛之聲動聞于壇上是則妨修學之魔障亂寂之靈害也設

○禁鉦鼓 鉦鼓を禁て佛と念ずるの建長のより智真一何の二人より起り  
 攝山に於て二十年の禁止せり今行を回儀と存して也

○禁植有利竹木 竹梨柿棗橘胡桃漆ホウケリ等竹木を植ふ事

○禁射弓靴鞠 文永の頃凡々の側小射的蹴鞠の放逸とて去り修學

○禁博戲圍碁雙六等 未練僧并は童子未うとも此遊と免乎り犯

○禁畜諸禽獸 大例行事録に僧尼律に引く此を辨と若山寺に禁

○禁入牛 河内國令別して馬と牛を畜せ當山に

○禁竹筵 三股の尻蛇魚の條に紀と又

性靈集 高野結界啓自文  
 沙門遍照金剛敬白十方諸佛兩部木曼荼羅海會衆五  
 類諸天及以國中天神地祇等此山中地水火風空諸鬼  
 等云々幸頼諸佛口持力幽明機熟之力以去延曆二十

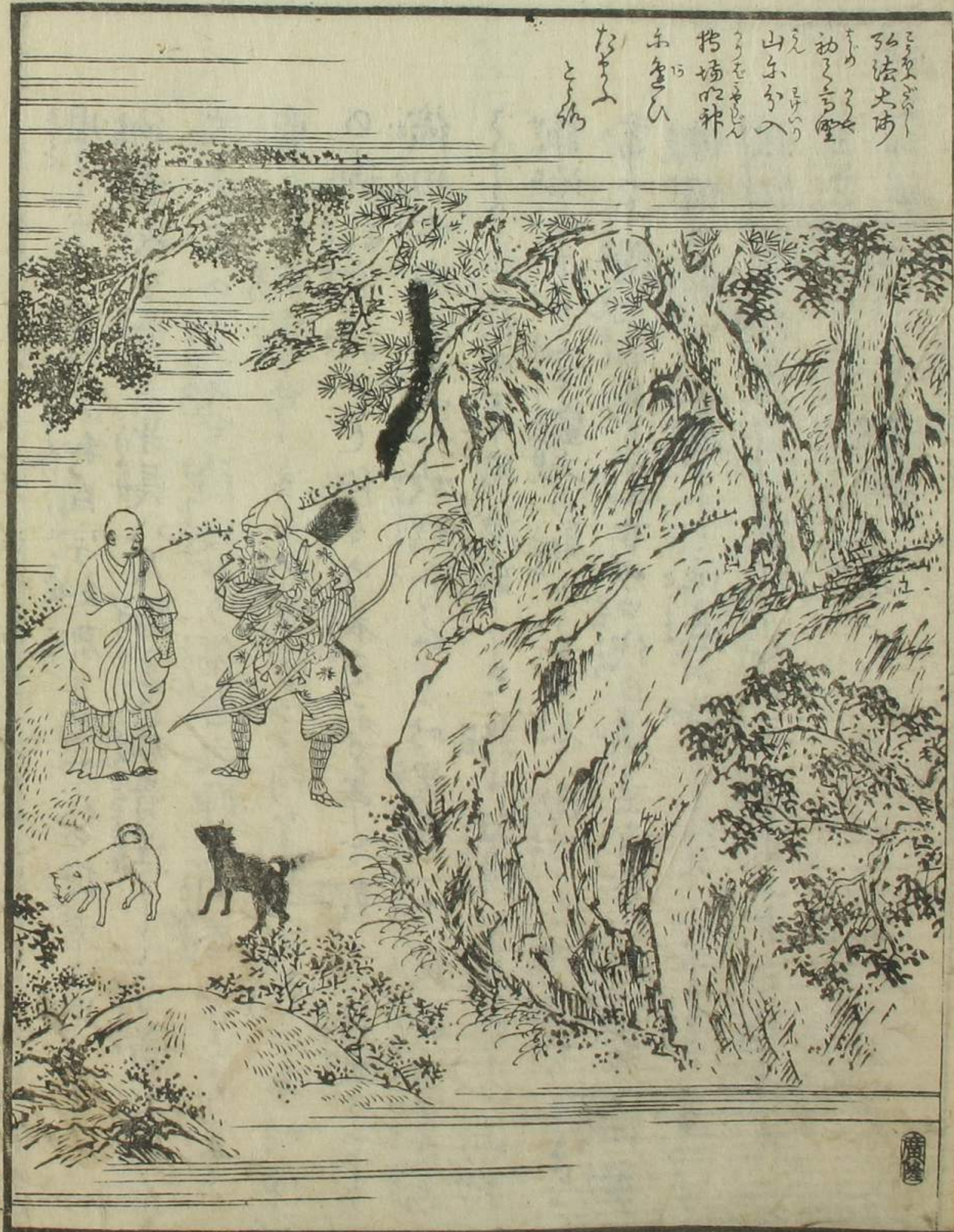
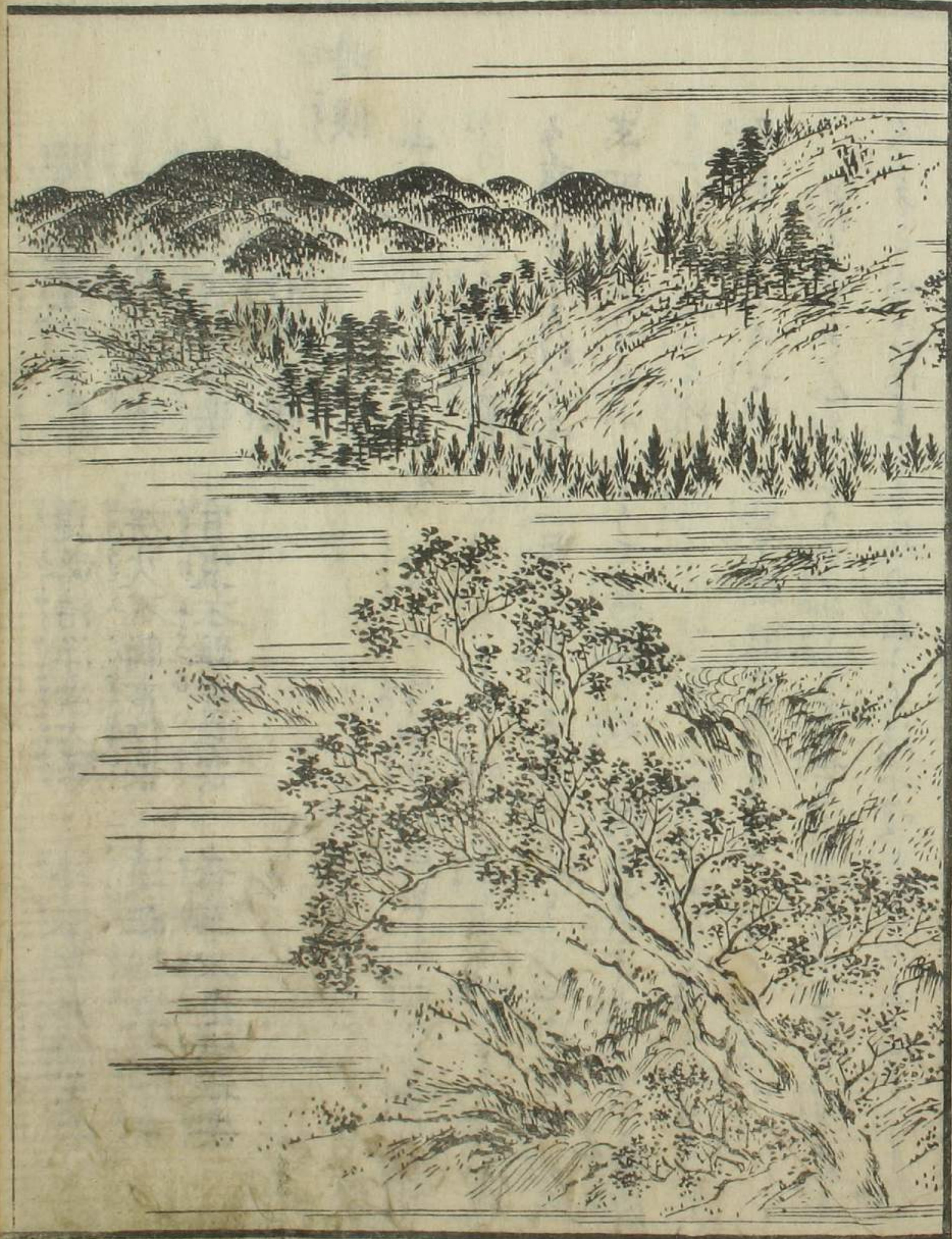
三年入彼大唐奉請大悲胎藏及金剛裏會兩部木曼茶  
羅法並一百餘部金剛乘平歸本朝云々一依金剛乘秘  
密教欽建立兩部木曼茶羅仰願諸佛歡喜諸天擁護善  
神誓願證誠此夏所有東西南北四維上下七里之中一  
切惡鬼神等皆出去我結東所有一切善神鬼等有利益  
者隨意而住

畜狗 種々の故事ありと云ふ也  
今その大要を記す

山上諸の禽獸を畜し支る嚴禁なるを狗とせし飼つる源  
と因縁ありと云ふ大ら上古 應神天皇の御宇 或は宗神  
宇と申別 紀伊國の黒犬一伴淡路國三原郡白犬一伴ふその  
不辨あり 口代の田及大飼人と添へて法守明神ふ寄附したまひし  
より明神の使隸と稱し大師請來の律あり爲防守故隨意  
養狗と云ふなり弘仁七年孟夏の比鼻祖大師殊外とて徑

歷しと云ふ時大和國宇知郡とて一人の攜者ふ遇と云ふ小  
袖青衣と着し身長八尺許とて筋骨逞し弓箭と帯し  
大小二ツの黒犬と隨送せり攜者大師と問答ありと云ふ  
當山小前導せりと云ふ普く云ふ所なり又建長三年明神  
の御託宣記とて種々の表示ありと云ふ後世とて  
織田古府當山を攻伐んとせり時黒白二犬彼陣中ふ走入  
りし山徒の軍威熾盛とて終に敵陣ふ破ありと云ふ山家  
静治とて令靈犬の助ふと云ふ今壇場ふ神夫ありと云ふ  
畜つる糧三石あり上古の口代の遺意なりと云ふ双犬常々伽藍  
神祠の畔と遊履しと云ふ他處ふ行ふが此外山よと云ふ畜つる  
但北狗の結東ふしと云ふ事と云ふ若偶來ると云ふあまのまをく山

山上十樂 明惠上人傳畧  
記小載と



弘法大師  
 入山  
 指場  
 木  
 なる  
 と





聞法結縁如意樂  
上水下水自在樂  
女人結界不俗樂  
出家所住無上樂

道路清淨廣大樂  
燒火不斷常住樂  
官家不難無畏樂

沐浴身躰隨意樂  
遠離俗家不知樂  
香華不退供養樂

時候

山上稍四ふりかの八葉の峰四方小周々木立と暗く生え  
がうらと旁濛朧く満渡り晴と曇り四のとき定ま  
る事かこれと二月二月も冬ふりて次冴とやうく三月の  
末四月のころめふりて梅櫻の類一時咲くころと  
まが中ふ櫻いと地ふ應けけりや吉野や傾のむふか  
極樂浄土の七重れ寶樹眼のわたりなりける人の教ふ  
人々もこのころにいとむかしのあはれはふ笑あはれふ心く  
る

紀三編

五月の時を遠く去り五月雨晴  
とほりやふきりいつ黄泉路の言傳を  
これどもやそこの路へ

山中佛の影のあやとをけきふあ  
くちのち民の卿馬家の後の内大臣実澄の教をこの

身は心也  
蚊の名はついで  
八月の霜  
一宿の  
黒漆の油

ぐん 宵の秋はるまじり降るまじり十月の風も動もすれは道と  
 埋十一月より後の事ふくふ行のほろもて城の中にあまひ  
 やるるあまひさうかききやうのりねをきききききききききき  
 雪浴衣とらつものそら看く法師とのわかみかきききき  
 くる處女ふと田舎人らやむびら後塔彫樓をく一  
 ころ白玉曳とらつて仙境物ふ白くと涌する博士も  
 りり飛鳥井栄推御い

降雪のつらきまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 ころころ清浄地を賞くまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 丸ころも破るまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 捨皮よりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 燈盡る夜に排油とくまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 の大塔層樓より積雪の顔く響音恰磐ふの預るまじりまじり

ころハ土室とく冷まらるる菴室よみかたせしころ陰くの室よ  
 大なる炉と切と火付袋とゆきまじりまじりまじりまじりまじり  
 と替るまじり寒威と違ふまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 敬く寺門街となまじりまじり法の都とまじりまじりまじりまじり  
 中まじり春のまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 ころ頃よりやまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 暇小氷豆腐と製くまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 小まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 ふつつころまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 一種とまじりまじり

春宮大夫藤原師房

高岸寺岑隔俗裳攀躋一夜獨忘歸自非廣却有縁土争  
 踏大権入定山月破無明秋景久嵐期三會曉声閑故昇  
 覺位謝他望心外縛身王者宣



出雲そ  
 空を  
 凌ぐ  
 こころ  
 瓜枝  
 白ひや  
 ういのも  
 瓜  
 ふいよ  
 朝屋  
 貞柳

續千載

新勅撰

續後撰

玉葉

新續古

月清

拾遺愚草

夫木抄

千首

建仁元年八月十五夜歌合 古寺残月

家集

草菴

雪玉

あつことそゆの山はわかや若のちと有明の月  
 野山にわきまて人の向ふは志の峰の月はほほ  
 今もてわきまの月を月とてわきまの月を月と  
 思ふはわきまの山乃若の室あそん若のほふあそん  
 ちゆ山そのほとらわきまの月を月とてわきまの月を月と  
 かうれはわきまの月を月とてわきまの月を月と  
 きんぐ代わきまの山乃若の室あそん若のほふあそん  
 あそひまの月を月とてわきまの月を月と  
 わらうあそん若の室あそん若のほふあそん  
 こころこのほつらわきまの月を月とてわきまの月を月と  
 ちゆ山からわきまの月を月とてわきまの月を月と  
 のつらわきまの月を月とてわきまの月を月と  
 約日けわきまの月を月とてわきまの月を月と

寂蓮法師

參議成頼

源具親朝臣

俊成

僧正栄縁

後京極撰政

中納言定家

般富院春輪

師兼

右衛門督通親

守覚法親王

頓河法師

道遥院内府





一轉淮南管  
 三冬製初調  
 棚頭凝瓊瑤  
 爐上躍瓊瑤  
 潔白高人操  
 方正君子標  
 笠山梅佳品  
 奇贈供厨料  
 巨鹿野人題



製氷豆腐  
 對山  
 圖



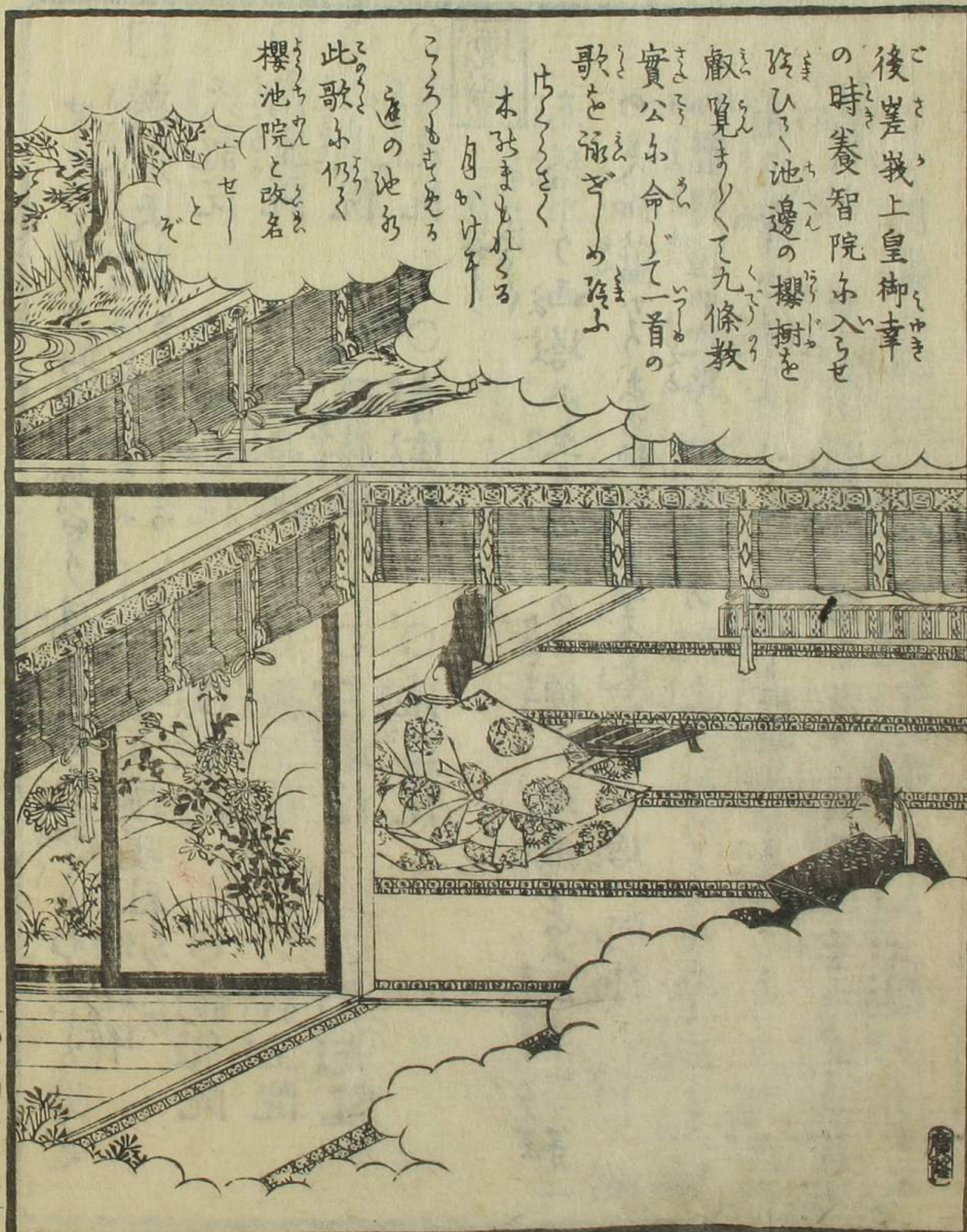
- 五智院
- 西禪院
- 彌勒院
- 金照院
- 愛染院
- 吉祥院
- 梅雲院
- 淨生院
- 如意輪寺
- 檀契 足利家
- 報恩院
- 淨生院
- 正覺院
- 檀契 土州侯
- 源光院
- 阿彌陀院
- 密門院
- 大光院
- 寶藏院
- 增長院
- 善福院
- 智性院
- 地藏院
- 正塔院
- 修學院
- 蓮明院
- 功德聚院
- 寶龜院
- 無量光院
- 花藏院
- 清集院
- 阿舍院
- 影現院
- 蓮上院
- 櫻池院
- 喜連川家
- 聖善院
- 大聖院
- 自性院
- 大湯屋

古々大門の傍らに先徳の忌日あり大衆及諸人々と沐浴

- 善光院
- 青雲院
- 法泉院
- 心蓮院
- 殊勝院
- 三藏院
- 昌光院
- 南室院
- 九品院
- 染王院
- 教王院
- 天龍院
- 延壽院
- 蓮金院
- 龍泉院
- 辨財天祠
- 愛宕大權現社
- 龍泉院

壇場

東塔より西塔に至る二町の距離に壇場と云ふ山上山下第一の大伽藍なり去の地峰を芙蓉と表し路の阿婆小舎あり諸伽藍拜禮の巡路に梵書の阿字形なりがゆゑに即是胎花叟會の曼荼羅羅やに花を花叟と表すことより奥院小間と梵書の錢字を踏むを又金剛叟會の曼荼羅羅小密嚴の淨刹と顯す事と西壇と云ふ山上櫻多しと云



後差我上皇御幸  
 の時養智院ふらせ  
 咲ひく池邊の櫻樹を  
 觀覽まゝして九條教  
 實公ふ命じて一首の  
 歌を詠ぎめ給ふ  
 けしき  
 本所まもれりる  
 月かげ平  
 こころもきこる  
 庭の池あり  
 此歌ふ仍る  
 櫻池院と改名  
 せ  
 ぞと



性靈集

此場の春色を魁とす故ふ古人の風流もまじ

葱嶺挾銀漢白峰衝碧落吾居住時頻有明神衛護即限

山四至水獻三寶表仰信情云託此勝地聊建伽藍名

金剛峰寺住此修道四上持念ス

十八景

壇場春色

高樹滿庭花滿眸芳菲妖豔道人留此花又是如連世水

日既無歌酒遊

并此のふらふらありふらふらありてあはれなる  
まことのまはれなるのまはれなるなり

山家集

あふらせしる世の繁華をばやうのまはるるをば 西行法師

ともふえしる世の紅葉のうしなまをのばもあひ出さる 寂然法師

続門業

あふらせしる世の繁華をばやうのまはるるをば 前僧正實濟

あふらせしる世の繁華をばやうのまはるるをば 士訓

○中門

あふらせしる世の繁華をばやうのまはるるをば  
あふらせしる世の繁華をばやうのまはるるをば  
あふらせしる世の繁華をばやうのまはるるをば

紀三編五十六

東寺の長者實惠大徳の真建しるまはるるをば 旧金堂の

あふらせしる世の繁華をばやうのまはるるをば 壇下建つて後丙丁の

災あつて文政年中に造建と

○金堂

古の御願堂と云ふ今の堂の  
元文元年の再建なり

本尊茶師如来丈六坐像高五尺餘のとき  
地蔵の御本尊あり深音

不動明王 降三世明王 長各七尺許す 金剛薩埵 金剛王

普賢延命 虚空藏 長各八

弘仁十年 寛寂天皇の御願に因り創むる各の二重の

閣やてそ造立の輪奐より室ふ巧微の精を究むとらふる

ひまの都卒内院の四十九重の摩尼殿と表に結守明神の純

宣ふ都卒の浄土に往生する者の集會所なりと云ふ

佛半日上高野金堂

川合衛

十里清風鈴鐸流傘臨金刹俯神丘半池緑疊蟠龍窟五

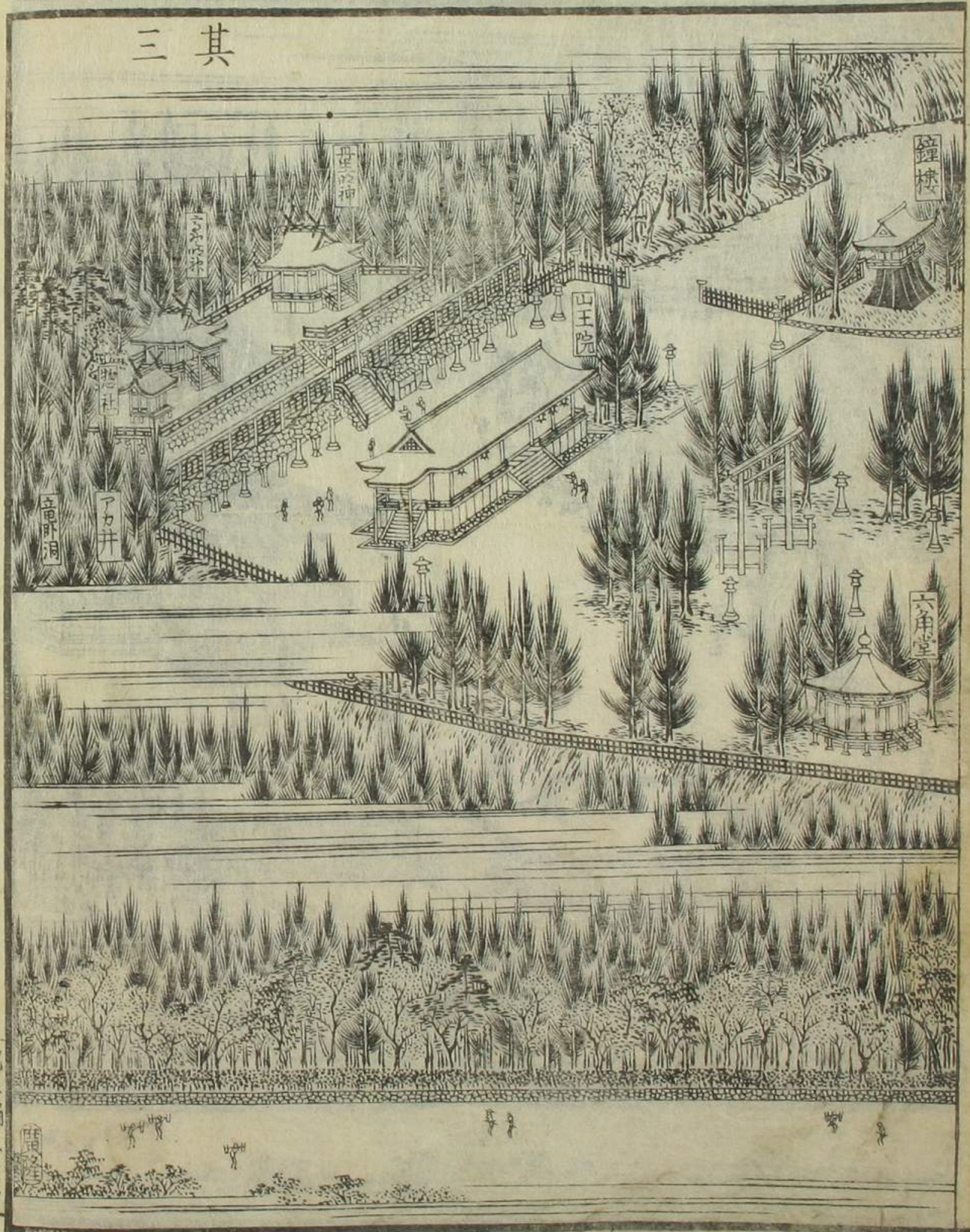
色雲圍孔雀樓靈鳥呼名來樹上寶花供佛發溪頭小僧







三其



所かり堂後の宝庫あり大師御所持の飛行の三銘佛持  
 乃ひ入唐御清來の密具御真蹟御手印の縁起 倫旨院  
 宣御教書大臣以下諸名家高僧の墨迹ありて蔵せり

左辨官下ニ 金剛峯寺

應早致祈請消盜失口舌兵革難更

右得彼寺所司等去四月十五日解状備言上末寺傳法  
 院鐘并佛及大塔西堂諸堂御佛等皆悉生汗今月十四  
 日已時傳法院鐘生汗因茲奉聞見同院御佛又以生汗  
 相次大塔西塔并諸佛等次第瞻作之處同以生汗給者  
 令陰陽寮占申之處理運之上惟所非有盜失事遂與離  
 方奏口舌兵革事放期惟日以後卅日内來九月十一月  
 明年二月節中並甲乙日也云云

保元二年五月廿五日

大史小槻宿祢

少辨源朝臣

社行由僧及國大臣等事  
其高野山社之社記り之新  
其由僧及國大臣等事  
其高野山社之社記り之新  
其由僧及國大臣等事  
其高野山社之社記り之新

七日

おのり

院廳

請諷誦事

三三坐衆僧巾布施三結

右忽於高野山始修兩部大法專令四海安穩恒満

紀三編五十一

仙院御願曰茲叩九乳之息鐘驚兩足之鷲王作請紺頂  
成就丹祈乃至法界利益不限仍請諷誦如件敬白  
壽永二年九月二日正二位行權中納言民部卿藤原成範奉

所被仰下復備後國

神人先達不狼藉才

奉自松石知子細給



黒印

下文寸合以不仍其之紙

熊野之印物候

恐之謹言

六月廿日 法下湛端

此の真の印物候は熊野の自存ありて頗る神ありたつた物ふ  
あつたものとあつたものと全くと長きものと有つてあつた印を押しあつた  
印を種宮に此印の印の四編ふつたものとあつた

楊山人

紀三編五之五

敬白 卒願事

右今度入洛無相違者當山舊領事可有  
其沙汰仍卒願如件

元弘三年五月十五日

尊邦印

山僧傳云尊邦は大塔宮護良親王の一名と云今諸書と考つた小護  
良親王と尊邦と中奉とと載せと且清皇子と尊邦とと名なり  
と云ととも護良の草名と較ぶる形状相似り且元弘三年閏二月親王吉野  
と出く高野に入つたあつた比尊邦と名のつたあつたや花押較既り  
此事を記すといふと今全文と載する序小再記す

新院教有入御堂山之處衆徒依支申無其儀之  
由注進之条殊以神妙向後於御方致忠節有祈

禱之精誠者殊可令與隆堂山狀如件

建武四年正月四日 尊氏判

高野山衆徒中

敬白 立願事

一天野社就聖跡本地可奉甚深法樂事

一行幸高野山可與密宗事

一為當山佛法紹隆與寺領可寄田地事

右條々天下靜謐之時可早遂之狀如件

延元々年十二月廿九日 天子尊治敬白

此震簡小紙書をせり包紙小吉野御座居りの御願文とあり天子の二字震簡  
ふとの例ありとて安守此年尊氏光明帝と立て 後醍醐天皇を私に廢帝と稱す  
此時ふありと世人のいひ此帝の天皇なりとありのあり故に此二字と書させ  
るるなりとて御世のあらざるを恐るるなり

敬白 發願事

右今度之雌雄如思者殊可致報賽之誠之状

如件

元中二年九月十日

太上天皇寬成

按小寬成王ハ後龜山帝の同腹代御弟ふましくと平世三年東宮ふま  
りて天授の末辭して太上天皇と稱せり後紀及玉河の山中御座居  
ありとて玉川宮と号すといふ本國小玉川といふ御名なり所謂高野の奥  
の玉川のうらうらとて妻後より東の山村ふましくとるなり

○三結松御影堂の大師御帰朝のときかの唐土明州の津より密

教相應の地子留まると誓ひて投げとまへる三結泊る路小沖

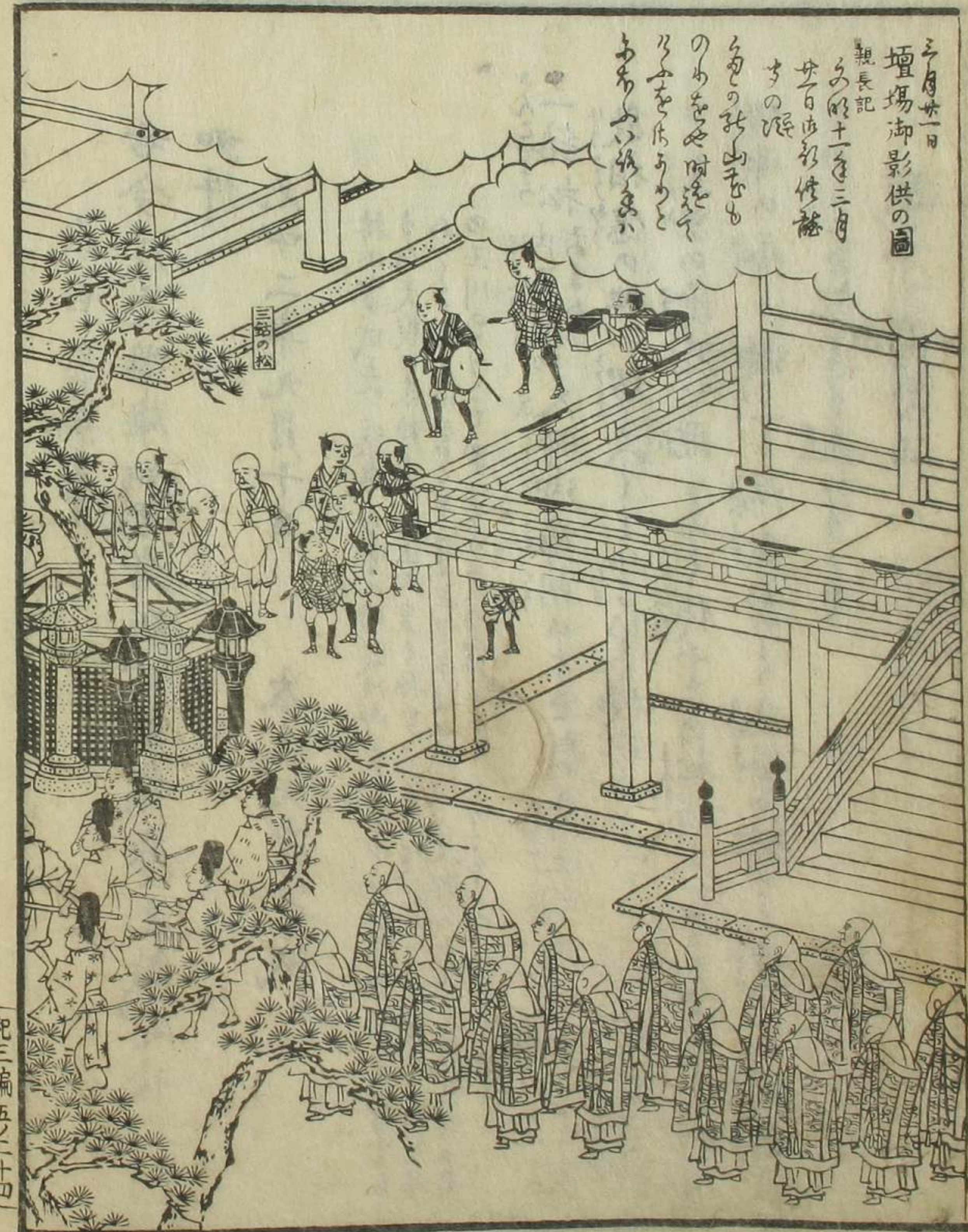
り糸里の滄波を飛らえり終ふまの松梢に留まるとかの狩場

明神の登る樹上は瑞氣ありと山谷に映乎と曰ふ彼杵の

まのまふかまるとるなりとを

敬奉 高野山





三月廿一日  
 壇場御影供の圖  
 親長記  
 三月十日三月  
 廿日御影供  
 事の源  
 三月廿一日  
 のめきと阿波  
 三月廿一日  
 ありあけ

大師遺室金銅三古一枚

右大師御入唐之時於彼國向吾朝誓約而投所持三鉢則屆當山留松上所謂示佛法可流布之勝地而已貴重也揭焉也小僧以去貞永元年辰十月十四日傳得件三鉢昔雖容身於北嶺今還結緣於南山誠是非小之往緣歟大師云我在天竺號勝鬘夫人於陳朝稱惠思禪師來日本名上宮太子云思禪師者天台高祖也我等定有因緣歟每憶前世值遇悲喜共催光波耳今相傳大師遺室以來今年廿二箇年今生感應頗為足身頻嬰老病志只在來緣仍件三鉢一枚謹所奉返納本山也庶幾且為全佛子之勝緣且為重大師之法物永奉納御影堂之後縱雖有權門勢家之嚴命堅慎堅誠勿取出堂外若有背此旨人者奉始大師聖靈之所明神至于山上山下護法

天等<sub>ニ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub>加<sub>フ</sub>冥<sub>ノ</sub>罰<sub>ヲ</sub>於<sub>レ</sub>其人<sub>ニ</sub>令<sub>テ</sub>與<sub>テ</sub>災<sub>ノ</sub>禍<sub>ヲ</sub>於<sub>レ</sub>其身<sub>ニ</sub>也仍<sub>テ</sub>湛<sub>ノ</sub>空<sub>ノ</sub>勤<sub>ノ</sub>狀<sub>ヲ</sub>敬<sub>テ</sub>白<sub>ス</sub>

建長五年癸丑七月五日

金剛佛子湛空  
奉送使者  
上願  
信覺

劍落大滝峯。杵懸高野松。早天霖雨足。瓶外有真龍。

東福寺虎閑

生因已熟至都寧。手裏金剛飛放光。瑞氣尚殘野山寺。一株松籟響杖桑。

大德寺一休

終南師遺稿

遙拋法器試靈蹤。三鉢高懸尚有松。已聽溪泉鳴玉韻。還瞻天女現山容。燈燃萬盞長時煥。及雨千花不斷濃。自法身歸寂定。龍華勝會願相逢。

十八景

三股怪松

雲石堂宗本

一株松茂影堂前。昔日飛來金杵懸。仰見統嘆人拜去。清風蕭瑟暮雲天。

風雅

阿一上人

雪玉

謾吟集

内倉美隆公 契 冲

鐘樓

此鐘宇九千九百八十一斤廿一兩一合白湯一千九百六十一兩二  
分と云々。鑄るに安かり性靈集より小原の大師の鑄造一  
所なり。大永元年の火焼亡せし。惜しむ。今を  
天文十六年小鑄造寸銘。高野山金剛峯寺本願満寺衆  
僧各敬白とあり

性靈集

金剛峯寺鐘智識文

應鑄造鐘事

夫捷槌一打三千之衆雲集霜鐘三振四生之苦氷銷故  
能爾尼免刀輪獄率休。鑊湯長眠聞之而驚覺永夜因之  
忽曉八部所以駢填三尊所以輻湊般若之標道場之主  
只在鳴鐘平然今金剛峯寺堂舍幽寂尊容滿堂禪客溢  
房。鴻鐘味造今思奉為四恩鑄造七尺銅鐘雖然道人清  
乞有志無力伏乞有緣道俗各涓塵相濟斯願生々吐如  
來之梵響世々脫衆生之苦聲今不任至願謹奉勸

後夜緩鐘

雲石堂宗本

十八景

華鐘高架法場中。制是梵同聲日東百八緩撞。深夜月三

庭曉遠宋寥空

新十

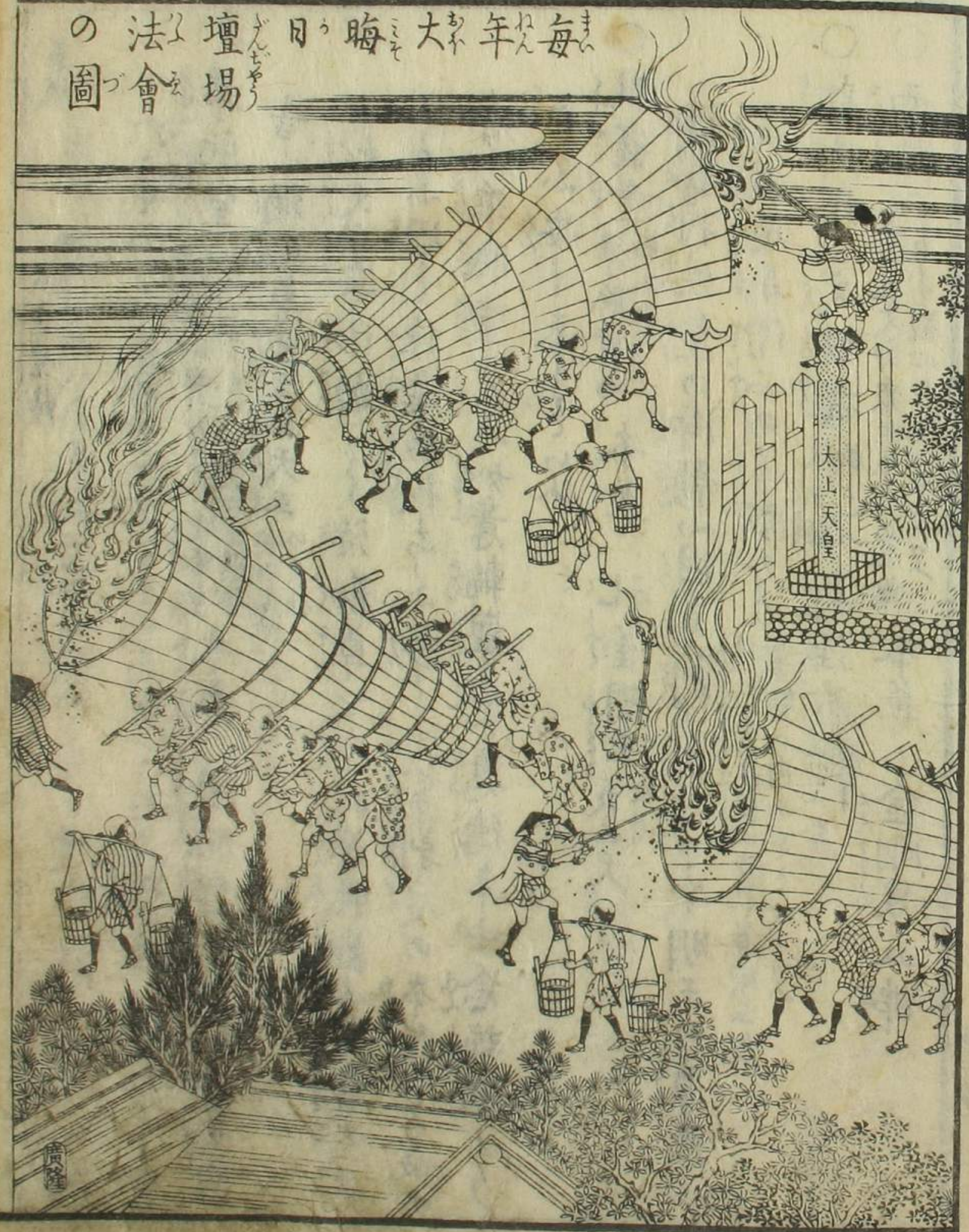
撞の音ちあけぬと云々。此の鐘はかくある。曉の音

拍玉

古寺鐘 高野山にありし鐘はるりうねるの音や先とありま

中務卿宗尊親王

毎年の大晦日 壇場法會の圖



野山除夕  
南山值除夕竹無塵車  
妨法界原清淨癘鬼詎復  
穢燕居無人訪燧燈坐香堂  
乾岳祭事畢祠前火光揚  
後夜鐘舌動寺務朝壇場  
五炬為先道煌々  
勢相望擔夫一百  
余長圍三尋強  
焰飛瓊英亂麟起玉  
龍跟神幣中央御列位嚴  
為行拜趨人羣集囂聲  
滿基坊復史法筵散相  
引歸各坊我性忱南寂  
却嫌它總忙火閣燈濁  
酒陶然獨林觴詩腸未  
鍊得朝歌已射林  
巨鹿野人



草根

古寺曉鐘

る中山月了のあまの宮そじやとわさ嘆のう孫

正

徹

たう中山のあまの宮そじやとわさ嘆のう孫

大納言光廣

○準胝堂

神影堂の西ふあり又の彌勒堂  
西御堂ともいふ言堂の遺跡

本尊 準胝觀音

如意輪觀

音 彌勒尊並に四天王共ふ大作

小松天皇の御願すく 彌勒尊と安次準胝觀音へ食堂あき

より小因あ 雅真檢校あ 移し出家剃度の本尊とす故

寺準胝堂とす如意輪觀音へ應徳年中念誦堂あ

あふ安し奉あ

○孔雀堂

準胝堂の

本尊

孔雀明王

長三尺七寸

後鳥羽法皇の御願あ 因あ 創あ する所なり明王の尊像あ

長者延果僧あ の手彫あ なるあ 役行者所製の孔雀明王あ

○新御塔

文殊樓あ 殿あ 新經藏あ

本尊 金剛界五佛

○西塔

九丈即衆生本有の九織

本尊 金剛界五佛

紀三編五二八

光孝天皇の勅あ 依あ 大師の素願あ と結あ と真然僧あ の

創あ する所なり數百年を経あ 破壊あ 及びあ 鳥羽

院御幸あ あり院宣あ と下あ 大治二年十一月四日か

御幸あ ありて落慶あ 供養あ の法會あ と修あ する所なり

○丹生大明神

本地胎藏界大日

高野大明神

本地金剛界 總社あ 日南

十二王子あ 御あ 拜あ 殿あ 山王院あ と入年中社あ の御あ 拜あ 殿あ

弘仁十年五月三日大師あ の御あ 拜あ 殿あ 本社あ 總社あ と勸清あ と闔山の

鎮守あ と給あ 入あ 妻あ と大師あ 落白あ 此總社あ 小摩利あ 支天あ と加あ へあつと

久あ いあ 祈親あ 上人あ 當山の荒あ 口あ と歎あ とあ 當社あ 祈會あ せしふ

明神あ 夢あ 小吉あ すとあ 致あ 風雅集あ と載あ する

僧鏡阿謹

寄進

金剛峯寺漢字天野宮八講理趣三昧並  
神事等用途本事

合拾叁解者

但十解者於彼御室前可勤社八講理趣三昧  
供料、茶也三解者御供神事雜要本也

右奉寄進意趣者先年之此天下大乱貴賤愁歎渚州逆  
乱万民滅亡聞是思是遍肝碎心何助此何救此只非佛  
神效驗者以何止此苦因茲内心發大願其大願有二種  
一者於高野山根本大塔修長日不断兩界行法遙續龍  
花三會之曉二者於再生權現御前勤行八講理趣三昧  
遠期慈氏下生之時然則返奉祈請大師明神顯令奏聞  
太上法皇之處忝達御慮已所被宣下明白也爰文  
治三年五月一日左衛門權佐平朝臣棟範於御使已被  
始行法其用途科以備後國大田御庄所令御寄進也是  
則非大師御加護明神御靈驗乎依之弥為興隆大師之

教法為祈請行法之不退彼御庄所當米拾叁斛所令寄  
進佛神奉用途料也其處者雖異理趣者一者彼此同續  
慈尊之下生即無其中間有退轉令勤行二箇佛神事等  
錢阿敬白

和勝元年六月廿五日



僧錢阿

其云錢阿ハ法花坊と号す足利義兼朝臣の法名なり異年号尤多しと云と  
和勝の文字他に見ゆるものや文中天也八條理趣三昧并神奉等用途本の  
と記せば奉文治年間此文書一と云建久五年七月の文也天也八講理趣三  
昧配書と云すものそあるは因り奉文治の末より建久のころに  
と云り今按ずるに建久改元のころ和勝と改むるは流言なりと云  
てかゝるもの但建久の四月の改元なりと云ふものありて改元と云ふ  
間の事なりと云ふ棟抄に永安二年壬辰十二月日諸國縣有改元之由公家  
被減仰元号泰平と云ふもの思ひ入るなり

十八景

玉殿峰嶽風色賒朱蘿華表石階斜松杉深處人來往

深峯鎮社

雲石堂宗本

鳥疎烟日夕佳

鐘樓 赤社の北あり昔よりをわたりて今もを響くあり  
元文年中に傳造りて其の縁文ありついでに  
千首

かひれもを今もを響くありて今もを響くあり

狂奇の湯もかる物とてきけり

開伽井 赤社の南林間あり大木の叢生し  
龍目洞 龍伽井の下

六角堂 本尊釋迦如來 四天王深沙大将執金剛神

平治年中 鳥羽上皇の御為小美福門院の建

紺紙金泥の一切経と納めたる表額にてく女院の御

親筆なり且本別荒川の庄と寄附

のちよ荒川徑藏より

七株靈木 三銘松 龍燈杉 赤社の

松 登天松 六角堂の北あり

倒指友 菜子掛松 鳴子

影向

櫻 大塔あり清浄なむのこけはの甲小明林親向

飯釜のま 後醍醐天皇の御願所

愛染堂 本尊愛染明王 後醍醐天皇

長日護摩供長日御談

命 修行せり

監漱盤 造り浪花の寄附

大會堂 蓮華の寄附

鳥羽院の御為小安元元年五辻

奉行を且去の堂長日御談

綸旨院宣御教書お敷通

内斎院の御寄附乃令文を憲清の自筆とや

奉行を且去の堂長日御談義料とて處の庄園を寄  
綸旨院宣御教書お敷通納めて宝庫ふらりと  
内斎院の御寄附乃令文を憲清の自筆とや

○三昧堂

本尊 金剛毘盧大日如來

銅像五百年

延長七年當山六古の座主濟高建主の会誦三昧堂なり

康和三年印供僧三口を置り至五智増進證の

○西行櫻舊跡

三昧堂前より西行の

山家集 三昧堂の多くは西行の筆なり

西行上人

○東塔

本尊 尊勝佛頂 不動 降三世

白河院の御願して等身の尊勝佛頂と安置せり

○蓮池

壇場の南東の方あり池中あり赤白の蓮を生ず中央は善女電王の

小荷あり天師の時降臨して當山擁護の御契あり

本尊 金剛毘盧大日如來

南谷

壇場の異方注進の

勸學院 壇場蓮池の本尊 金剛毘盧大日如來

○鐘樓 宝庫

敎使門 畷

築地 前埦

庵室

此院小於々毎年八月廿一日より十日の間學子業を弑ひ

て翌日問講ありて神法樂を備ふて學道とて都て

後嚴重かりて同一山の諸普清鳴物ホ堅く持守この衆

山中はふ才と擇びて世人と兼ひ着座し終るとき配

闍の僧二十箇の闍を以て列衆を探しめ是小中者

を講師とす即竜猛大士無畏三蔵乃ひ大師制の論疏

寺都々二十五卷の中毎年一卷を暗誦講演す講終

後満座論議あり例せば儒門の人進士を奉せ

のら才小依り官階を昇が如く去の勸學會の新衆

勤り畢り會衆の名を以て後才罷ふ随て大判を領し

學と敎示とありて文禄年中 神君御登山の時

此會のものと具ふ 聞る往昔天平延暦の頃 勅有



明王院如法上人名  
 を懐巻言ひいひ治  
 聞博識久安元年  
 四月十日都幸天月  
 昇つて後ふき弟子  
 皎徒存食を調  
 居り其供ひひく  
 上天りてて飯ヒを  
 落しけり其知を  
 松子の芝といひて今  
 に壇場といふ



本尊  
 因縁  
 海士郡  
 塩焼  
 地蔵  
 の  
 條下  
 委



- 遍照尊院
- 金生院
- 眞珠院
- 遍照が峯

檀契 津輕越  
 淨菩提院  
 水壽院  
 壇場の南

- 覺城院
- 加納院

- 明眼院
- 淨眼院

定めしき度科及身の旧風唯この山は妙なるありを殊  
 勝の... 抑去の院會り建久年中右大  
 將頼朝卿衆徒学業勸勵のめ草創り又弘安の頃  
 北條相摸守時宗去の會の嚴重精密なるを随其秋  
 田城介恭盛... 此院を造営せしむ又文保二年 後宇  
 多法皇院宣を賜ひ肥後國岡牟田庄を寄附し...  
 勅願所とす 後醍醐天皇建武二年より弥惠学を勵まし  
 づ 綸旨を下り且講師の名を祀り後代に...

八葉の一やそ世俗覺海山とら峯中ふ學海尊師の祠並  
 看經所等あり覺海師と但馬國朝來郡の人なり曾々當  
 山ふ草菴と結び自開敷花王と号し南方室部南勝の名  
 と呼ぶ建保五年檢校ふ補し終ふ修羅即舍那魔羅即  
 法叟の覺悟を得俄然とく大身小現と兩腋小羽翼を  
 生し直ふ大惠ふ向く飛去る永く當山の結護とかりふ  
 時ふ貞應二年八月十七日春秋八十二歳なり師蓋し學德  
 淵博なり大ふ宗風と振起す云々今テ山上ふ於く不慮り  
 危難ふ值ふとの必尊師の出づるなりとて大ふ悲とかりす  
 沙石集天狗之人眞言教事の条ふ近ごろふ好ふやえし言師も天狗ふか  
 早七後大直の秘法と異けて弟子に授けりつう智惠道心ありふの如く  
 出離すべしと云ふ

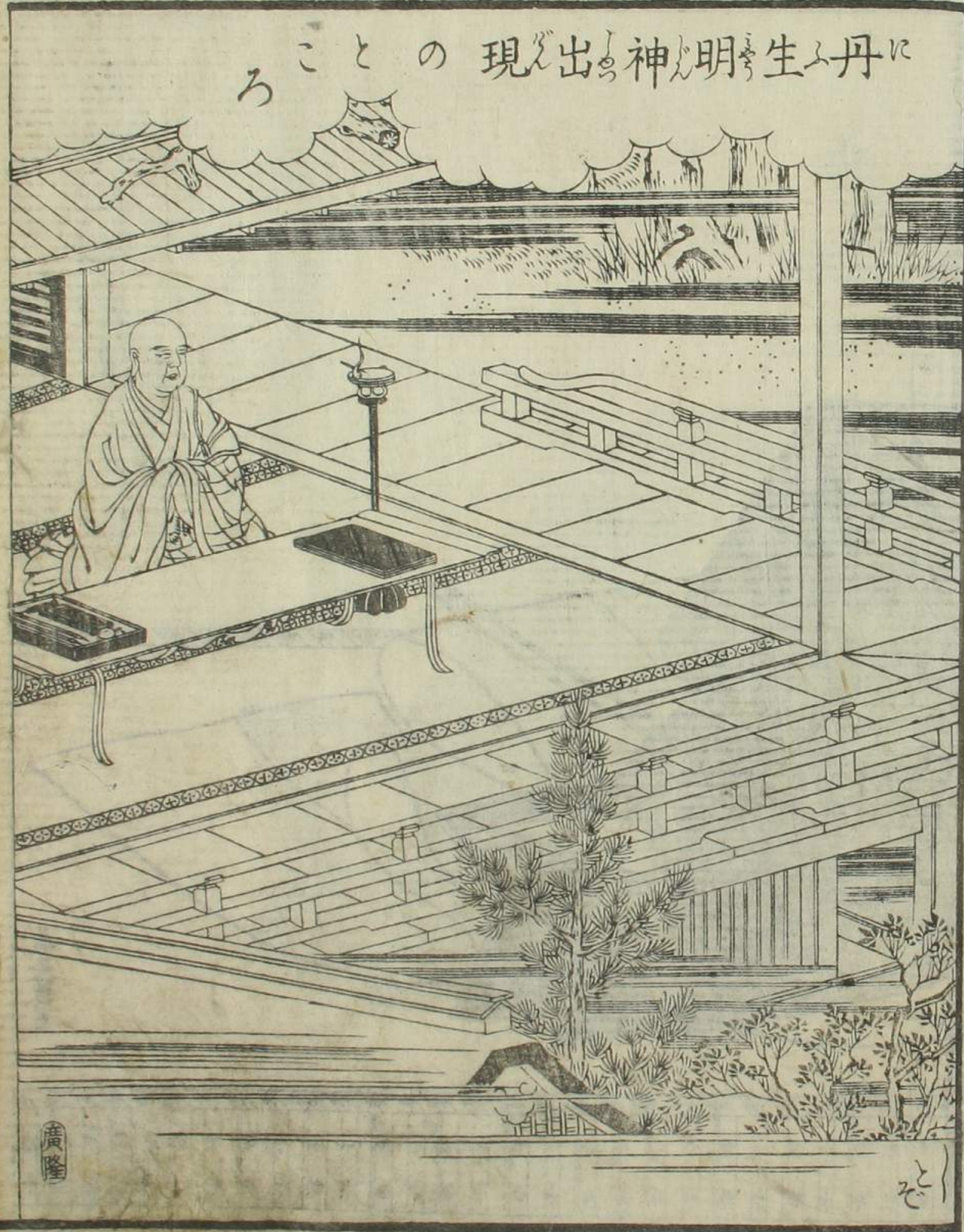
虎が峯 八葉の一やの遍照  
 古の湯屋敷あり

地蔵堂 本尊 地蔵菩薩

本尊只大師の御作今ハ小野皇御の製ける所の地蔵尊と  
 安置し即南谷六地蔵の二か  
 成蓮院十輪院 青雲院 花王院 寂勝  
 院ふの堂は皆本尊の地蔵尊をまつるなり南谷  
 六地蔵

○ 增福院	○ 東禪院	○ 西室院	○ 成蓮院
○ 證菩提院	○ 南院	○ 檀契	○ 石川日向侯 松平采女正殿
○ 大衆院	○ 檀契	○ 前田大和侯 田沼侯	○ 證覺院
○ 花城院	○ 常衆院	○ 法林院	○ 龍照院
○ 般若院	○ 不二院	○ 自性院	○ 如意珠院
○ 明星院	○ 靈山院	○ 持宝院	○ 青龍院
○ 悉地院	○ 檀契	○ 織田近江侯 松平因幡侯 池田丹波侯	○ 織田大和侯 池田信濃侯
○ 心南院	○ 檀契	○ 伊東播磨侯 松平安藝侯 筒井伊賀侯 本庄内藏助殿	○ 松平長門侯 松平壹岐侯 松平美作侯
○ 楊柳院	○ 最勝院	○ 三寶院	○ 花王院
			○ 補陀洛院

丹生明神の出る所のことのろ



廣隆

とぞ



宝性院の宥快師ハ其廣徳天下の知る処ハ  
 音猛の論無畏の疏高祖の制作悉述釈  
 て鈔を以て其外著述數百卷ハ  
 或時悉曇章を鈔述して深更ハ  
 丹生津姫の神錦衣玉冠瓔珞  
 手ニ魚腦の燈を提げ幽扉に  
 入来りて暫問答ありて一首の御  
 詠をまかりし

法の

宥快師答ハ

暁を

法の

神歡

喜す

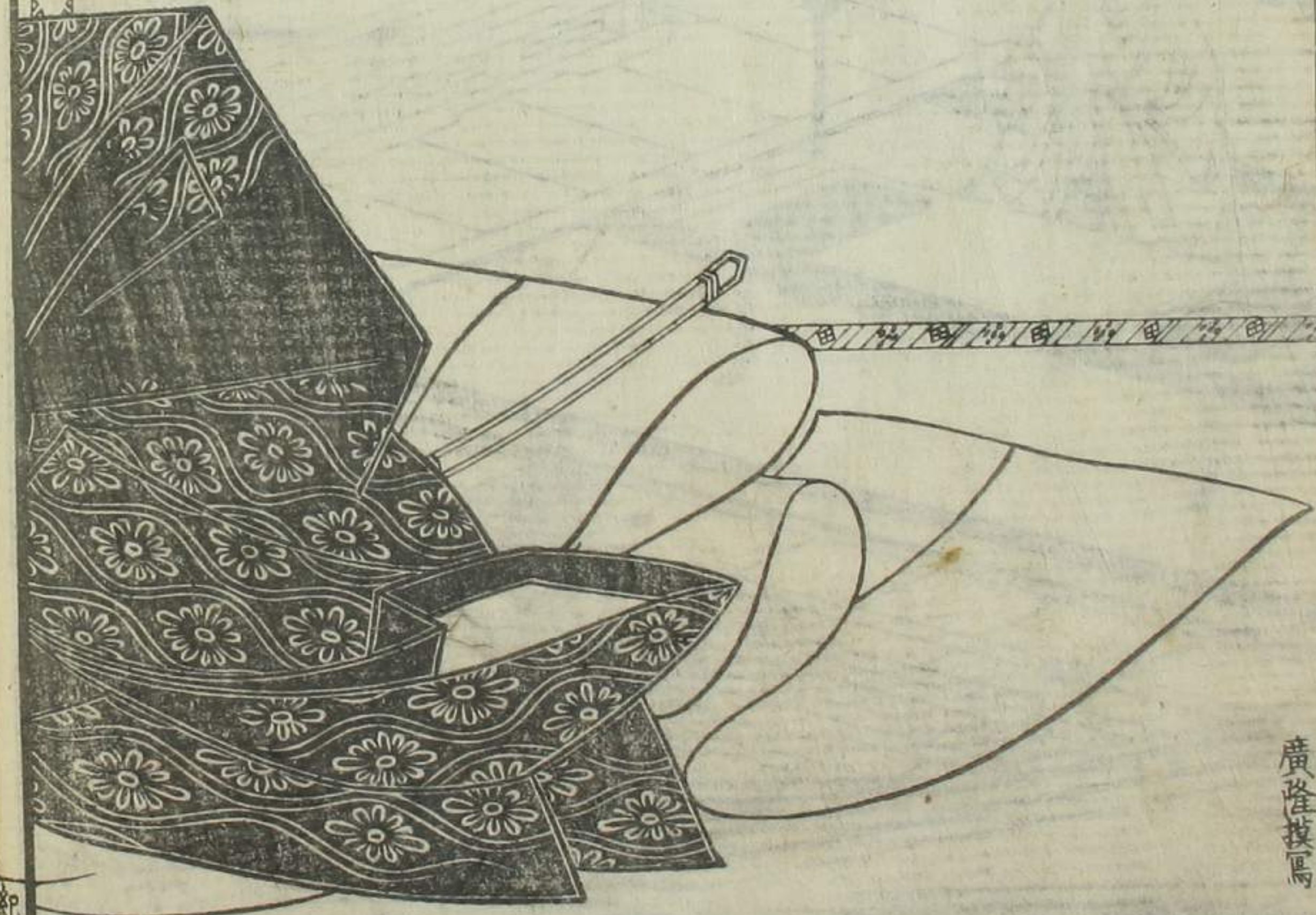
とぞ

絶三編五三十五

蓮華生院藏



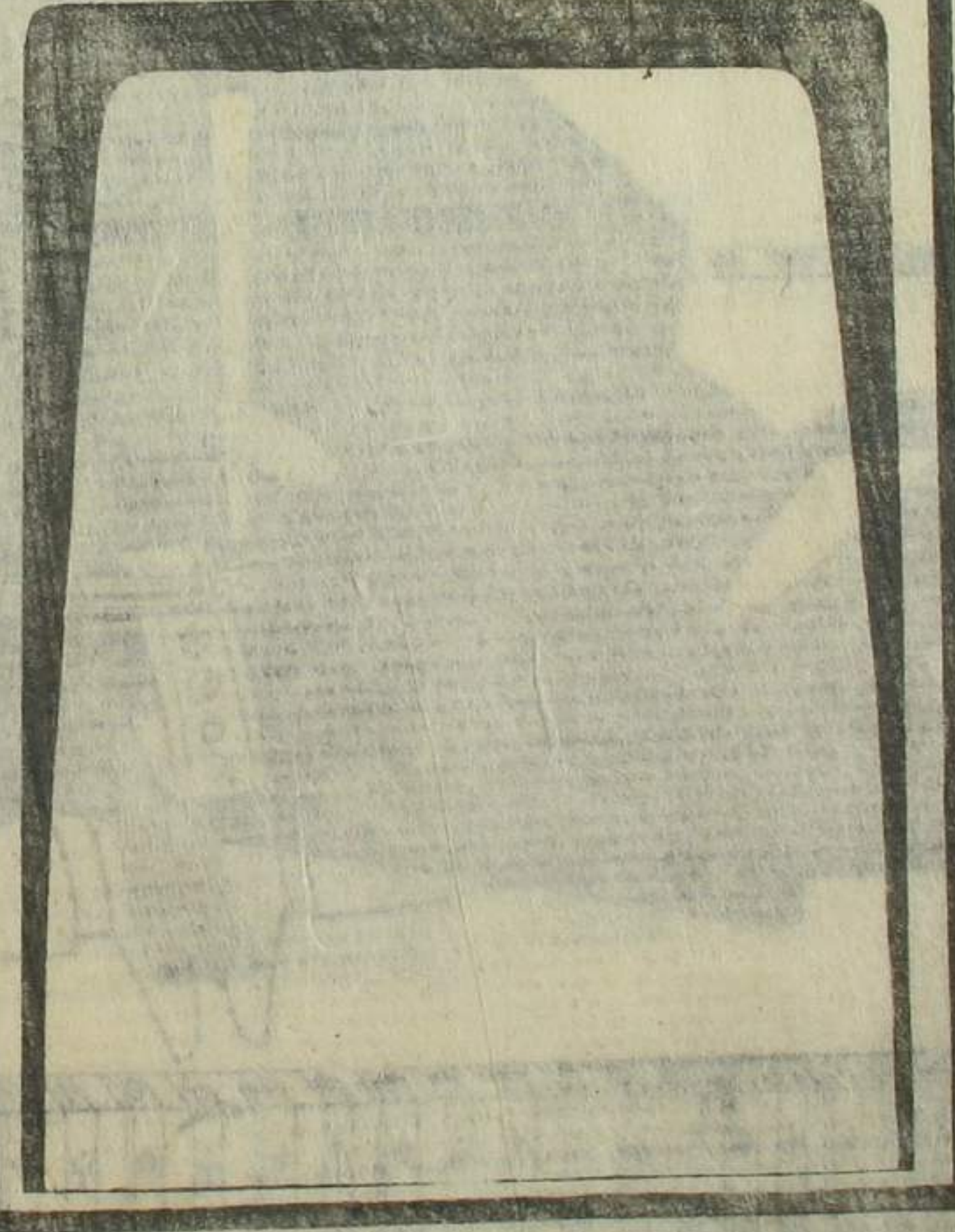
豊臣太閤肖像



廣隆模寫

え  
ひの  
ま  
瑞溪硯

ぼ  
く  
えん  
宝積院所藏



廣隆縮寫

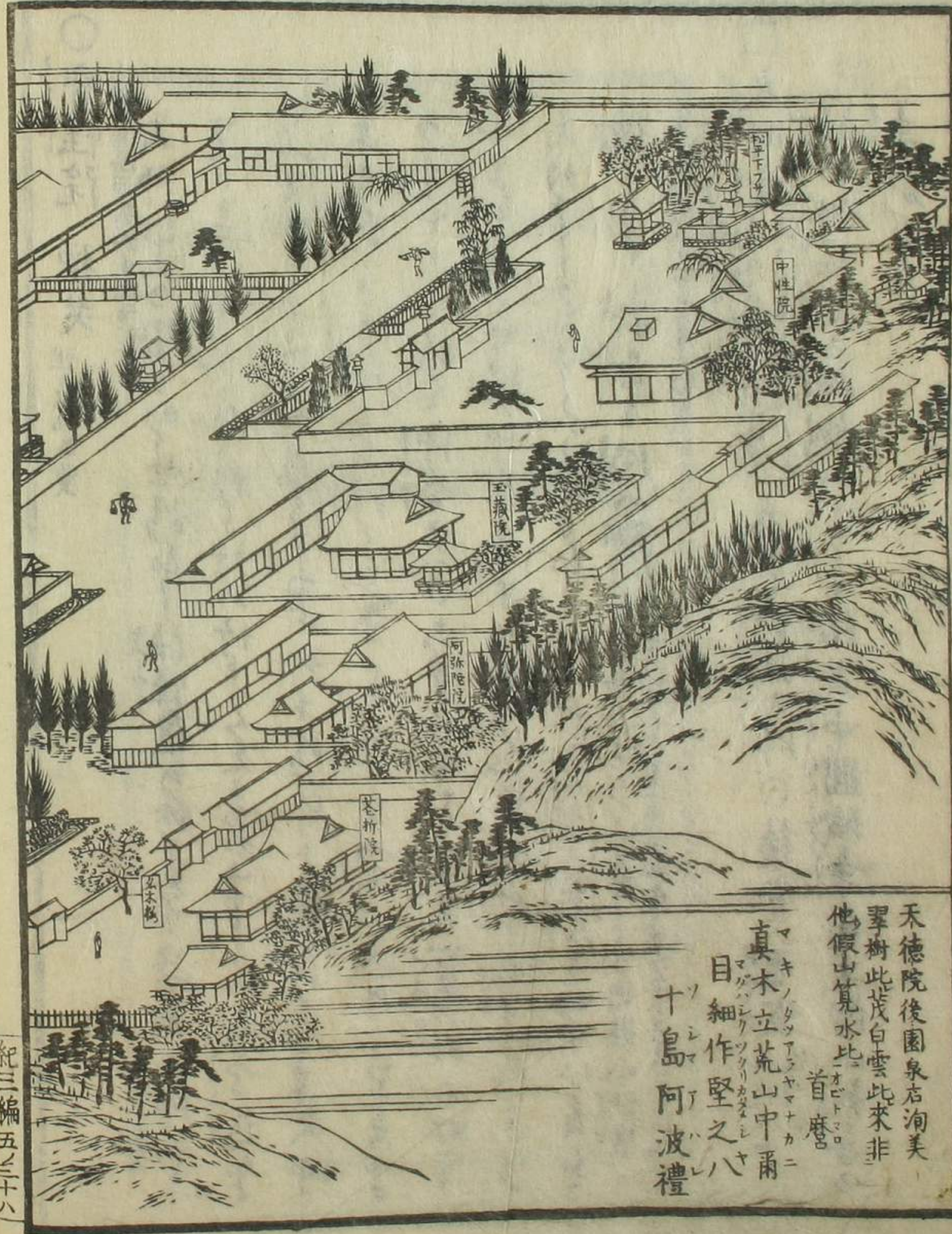
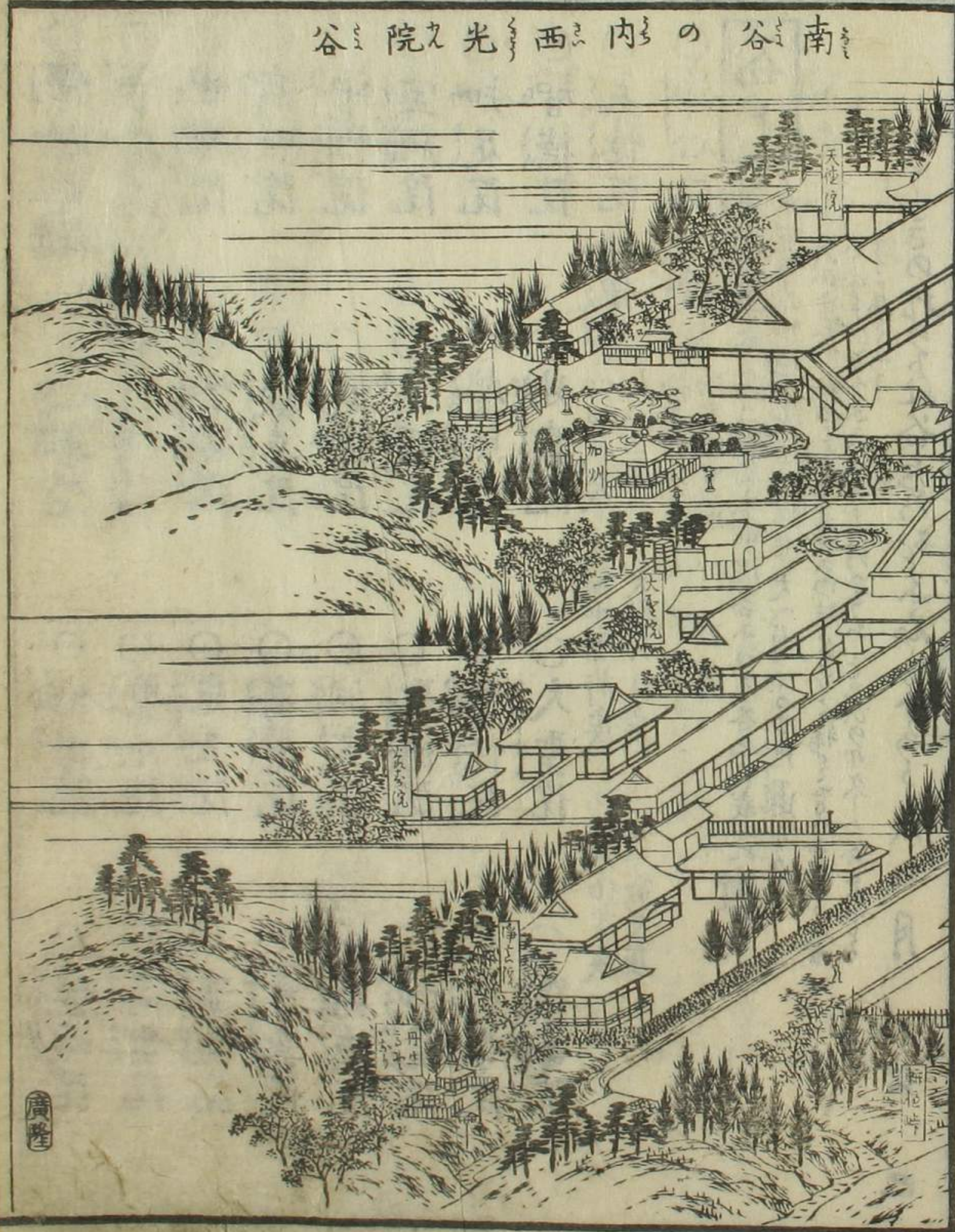
○寶性院

檀契 但及弘石彦

領河法師高野日記云  
 大師は山の園をかせ給ひ一法性院の坊ありづとも繪<sup>ふ</sup>りて  
 つまも及まじらうそくけり行ハ竹もえま本もえん馬<sup>うま</sup>を  
 りん文なるものこころさゆかき給ひ一物もあらず中興大師  
 去のゆききつひを給ひてまをせうまは遠のこころ文字  
 のころをきつ給ひ印合<sup>あ</sup>すはさるもあらず以<sup>い</sup>りはの四十  
 ひまをまきせ給ひ一よりまのいれまけりてまをせうま  
 えけり一ころそとひりてつらほを給ひてまをせうまを  
 總<sup>そう</sup>て給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて  
接すのち祖のつらほを給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて給ひて  
法の字母弘三乗真言演西句をえんまをせうまを  
作し古書ハニマハハ  
格遺ハ勸テ

□ 大師堂 大塔の強三ノ余あり 本尊 弘法大師 ○ 鐘堂 齋室 山役入の住持なり  
 後白河法皇の御鯁ふりて 治養中圓城寺前大僧正賴喜の  
 草創なり

谷の院光西の内谷の南



天徳院後園泉石洵美  
翠樹此茂白雲此來非  
他假山算水此首磨  
マキノタツアヤマナカニ  
真木立荒山中爾  
目細作堅之八  
十島阿波禮

- 釋迦文院
- 寶積院
- 世尊院
- 高照院
- 中性院
- 宝瓶院
- 知足院
- 智徳院
- 大徳院
- 浄心院
- 心善院
- 宝壽院
- 歡喜院
- 遮那院
- 法明院
- 榮照院
- 地藏院
- 加賀院
- 松平山城院
- 松平伊賀院
- 修禪院
- 摩尼院
- 光三院
- 高覺院
- 洞雲院
- 聖徳院
- 中性院
- 大聖院
- 龍城院
- 高雲院
- 寶宝院
- 竟壽院
- 萬徳院
- 妙見院
- 教學院
- 兼壽院

谷上

壇場の正北より東へ本中院谷上つて谷上の義一は滝の  
 系下ふえの壇場より嶺弁天へ通ずるの淵邊なり  
 天正十三年秋のころ金堂の西柱を建て拜堂を造りて人の  
 往来の便なるを以て谷上といふなり  
 かゝるのたのむる谷上なるもゆゑの月

右側

穀屋 大塔の北方

大塔金堂社西塔會堂等より道心五人の内は修造  
 まして西の端小廳を揃へ御修理方の役人らも集會し伽藍  
 修造の事を相議と允普請し預る者も皆な不寓居す

- 西禅院
- 金剛院
- 蓮金院
- 本誓院
- 慈光院
- 來増院
- 無量壽院
- 知足院
- 正智院
- 威徳院
- 顯正院
- 万勝院
- 宝城院
- 三蔵院
- 宝光院
- 安樂院
- 光明院
- 觀智院
- 彌勒院
- 正蔵院
- 最勝院
- 上智院

左側





正智院法雅法師の時の  
 名僧ありし時半字抄  
 一雨と度しなげ法中  
 あくもせし筆法中  
 にまゝはとほり

- 長福院 檀契 木曾家
- 引接院 ○摩尼院
- 法隆院 ○寂光院
- 心王院 ○龍生院
- 智源院 ○宝集院
- 成就院 檀契 伊達薩摩侯
- 愛深院 ○臺龜院
- 轉法輪院 ○千蔵院
- 圓明院 ○日光院
- 中臺院 ○大智院
- 龍室院
- 一の龍不動尊 嶽山の樹
- 妙觀院
- 光壽院
- 大雲院
- 般若院
- 多聞院
- 蓮臺院
- 聞持院
- 德壽院
- 月輪院
- 青蓮院
- 南昌院
- 法明院
- 西光院
- 瑞光院
- 檀契 備前侯
- 三和院
- 妙雲院
- 明眼院
- 高善院
- 明蔵院

當山万水の源一て是と最中の終と守是より谷々のあり

此の地を谷上と云ふ  
 大龍ふくくと徳々四十八龍の称あり故ふ

□ 大日堂 乾が九二町あり 本尊大日如來

○ 鐘樓 永正年間古鐘あり 東西二基塔 礎あり

長元年間 後一條院御願ふ因に創する所なり後天養

元年宇治入道忠實公御登山のとき再造と企つ五年を経く

久安四年内大臣頼長公御登山あつて即入道の御為ふ落慶

供養あり且額をかげく金剛心院と号すまゝ

□ 嶽辨財天社 壇場の軒方十町

○ 拜殿 鳥井 東南西道内 金剛童子祠 荒神社

昔大師末世の福田のよふ如意珠とよの峯に埋て宝瓶と

安立て天女と勧請して財福を乞ひうよそのら天狗妙音

房よの嶽と守護と云ふ

無量壽院の  
 深覺大僧正の  
 九條右府師輔  
 公の男なりこの  
 山のなり専ら  
 無量壽佛の  
 三昧ふ入て  
 當院と草  
 創す萬壽  
 三年帝御  
 愍のとき加持  
 即驗と現す  
 奉賞して  
 禁門ふ出入  
 せしむ





明算上人 大徳  
 後園の  
 池中に  
 小竜現  
 宝珠を  
 奉  
 其寺を  
 竜光  
 院と  
 名づ

本中院谷

壇場の良方小 隣に往還の尤ふ ありて小田原谷ふつ 當山の中心  
 根本祖師最初の所住 中院ありて中院谷と  
 同

山家集

同  
 さくさくちりちりやどふとさるる為痛とさるるあやめやいづづとさるる  
 おくぬとさるるあやめのねもみさるるあやめやいづづとさるる

- 東南院
- 大乗院
- 心覺院
- 總持院
- 親王院
- 乘截院
- 相應院
- 龍光院 又中院
- 瑜祇塔 龍光院境内ありて金剛峯寶樓閣 本尊 金剛叟大日
- 阿闍宝生觀音虚空藏 此塔ハ大師御請來の圖とありて真然僧正授け 傳ふ 大師の遺命と受て觀年中創する処ありて五峯八柱の揃四九三十六の操妙巧精絶殆鬼工の金剛峯寺 称号の權輿深秘大塔并此塔あり四柱小九尊 八柱小八大菩薩 及び八祖等並皆僧正の入室會理

僧都の画く所かり尔後數度の兵燹あり寛永三年直江山城守の後室を再興せしむ文化六年の火災せ

らまうしと今の住持某鼻祖の遺志を継いで是を造営す  
塔の額文曰金剛峯寺宝樓閣瑜祇塔  
再興直江山城守後室為三世安樂也

- 明王院
- 遍明院
- 瑞泉院
- 宝蓮院

○中蔵院

蛇原東塔の南より六時の後の志まをとりし

傳へつし此山開闢のとき此処に大蛇ありて人を害と大師即竹帝と把し是を拂ひ終ふ大瀧を退けりしを怨竹帝ありとて山中今ふつり竹帝と月いづる此處なりとぞ

○六時鐘樓國字と交り

南山高野金剛峯寺ハ大師草創より此に密教とありて一絲毫と違易せし今ハ儼然たり然るも此山中ハ洪鐘有とありも二六時

と報ずる聲なり衆徒是を嘆嘆する事久し爰小尾及海東生縁福島宰相正則勝と千里小交し治と大邦小やんず故ハ備藝二の州を領ず外仁義と施し内孝養乎旨とありし先考の父慈愛の母追善のさふ治工と招き新ハ華鐘を鑄り彼山ハ寄附す加之三箇の淨人小命し時々の響音とありしむ九その功德是と撃し一切の惡道頓ハ停止乎得是を聞ハ十方の聖衆共同と利すを願ふ所と此力ふより諸の衆生現當二世安樂ありしと也

元和第四戊午曆二月六日

福島宰相月翁正印大居士在世の時洪鐘をわく万世ハ残を雖然寛永七年十月四日とありし時静攸之災ふめり鳥右とありし梵鐘を鑄り高樓ふかく伏てれがとありし鐘好音とありし千株萬歳とありし事と

寛永十二乙亥曆正月十一日

且過堂六時の鐘樓 本尊準朕觀音  
右登結の依人宿所とあり者此堂ハ投宿せしとあり今ハ廢し

く本多の準胝堂より移すと云按ずる東坡詩曰身是雲  
堂且過僧住小旅僧一宿之處曰且過とあり蓋御圖記  
大炊屋とあり是なり

□ 荒神祠 典山寺の門

大辨切徳天と相殿小安と大師この荒神と勧清一壇場  
の鬼門と守護せり

○ 興山寺 本尊阿弥陀佛 惠心僧

○ 東照宮 典山寺後の山よりあり 御供所 一切経蔵  
奥及秀衡旧當山寄附せり御供金泥の

一切経蔵

寛永五年 台命小因造立一奉神像日東御鎮

坐八幹の一大佛師康猶の造りなり如御劔ハ堀川

國廣の作や且御供料一百石と賜ふ 神宇拜殿

ホの壯麗且年中の精祈奈令等甚嚴密なりを地ち

典山寺昔小峙ら眺望のやぞ万樹翠と凝く南  
峰と繞り西壇豊と並り西空小聳り春花秋月時と  
て佳なりとあり実小南山の勝地なり

○ 巡寺八幡宮 毎年二月七日及七月七日の夜神幸り奉る

大師産土の神して往昔の讚州多度郡白方村小法座

御旗及し御旗竿中差の御矢なりと云々家古裏來

のと神威小因夷賊塵滅後御旗海と涉り紀川

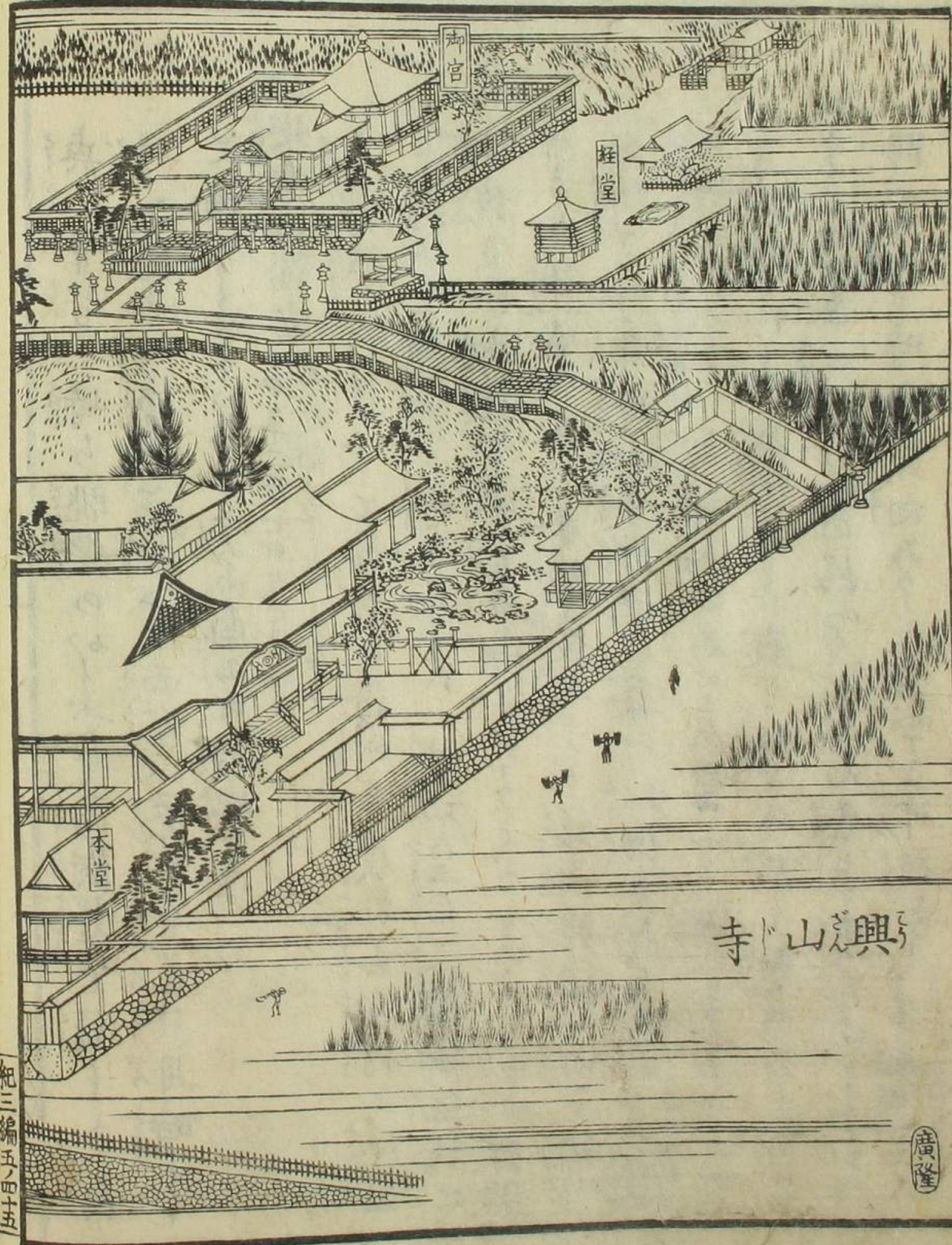
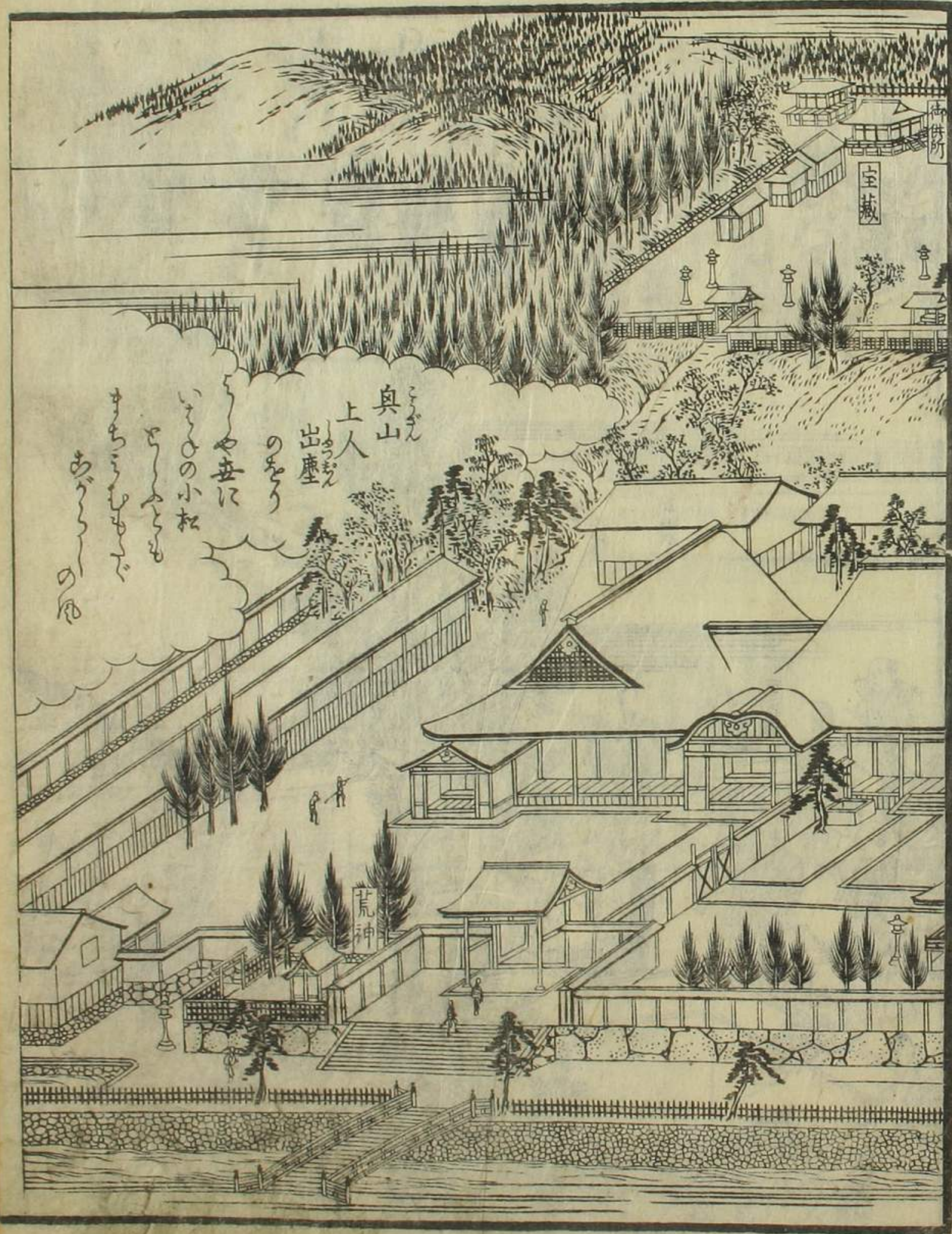
と所伊都郡山崎村涼の森れ松梢あり移り小水

と今は那井村 即神勅ふ當山に迎へなりと云々大師

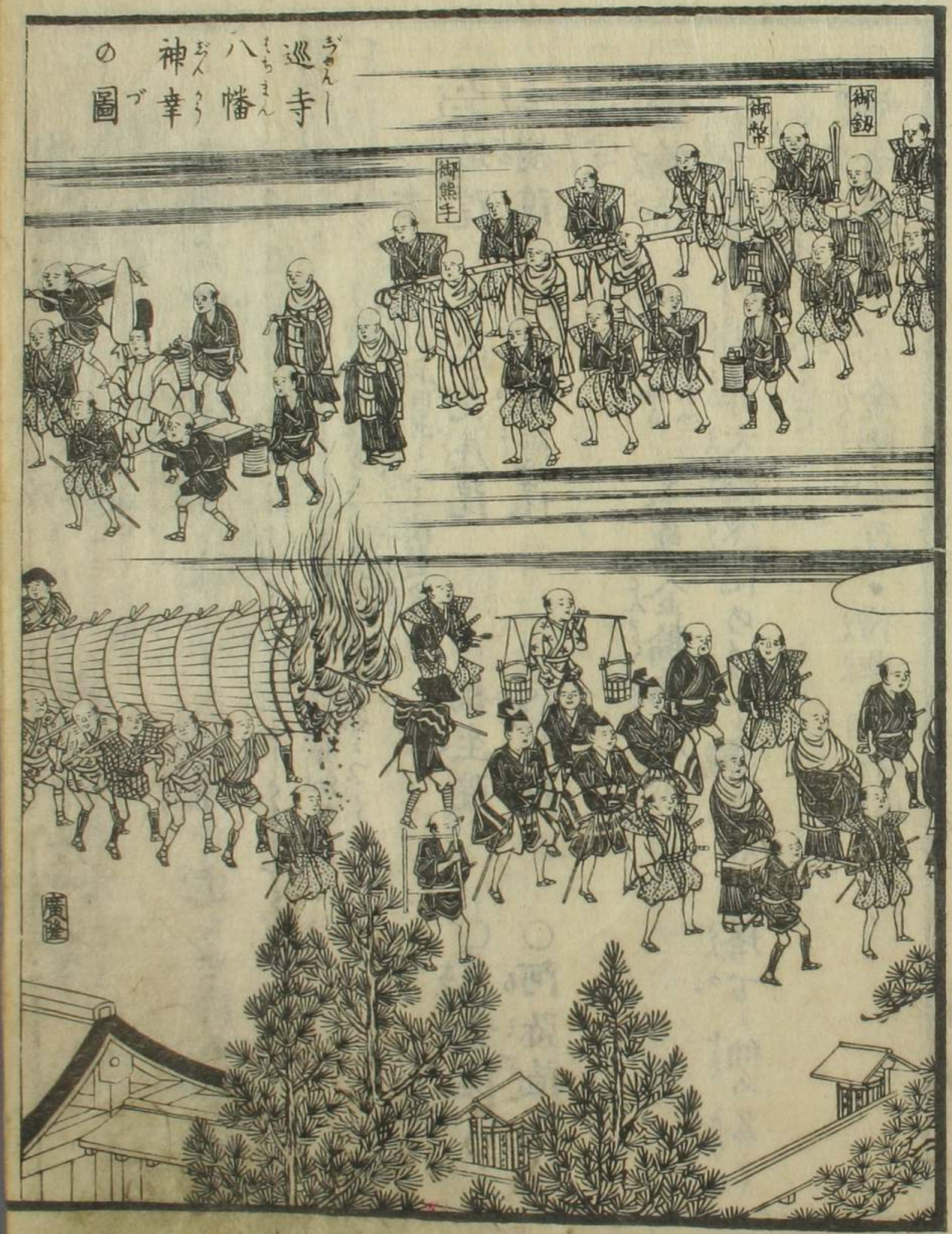
と御誓約り曰聖と吾と影と形の如く聖のありと云々

とわの吾必行むとの移りと云々東寺東大寺も大

師の在り時御影向ありと云々神初あり



巡寺の神幸の圖



蓋御直下拜せんを恐るゝ元和年中美濃と云知る仁和寺  
 覺親親王の教一洞窟に在り 勅封と云ふ事あり  
 ○巡寺大黒天 毎年五月晦日十月晦日  
 の夜御神幸なり

大師末世薄福の資を憐れむ此尊と造らせ給ふ治安  
 三年法成寺殿下莊園と寄附し

心院谷

心字池あり谷を以て名づく不動塔あり入りおの  
 谷なり 壇場の北方三丁あり五の室谷といふ  
 右側 樹と小田あり

- 宝城院
- 宝樹院
- 蓮定院
- 威徳院
- 福生院
- 真乗院
- 阿光院
- 阿弥陀院

○金輪塔 不動堂の西 本尊金輪佛頂

寛治年間明宗大徳遷化の後遺骨を此塔下に納め名づく  
 菩提院と云ふ事あり

- 妙音院
- 金剛蔵院
- 西蓮院
- 五坊寂靜院

- 宝蔵院 檀契 堀大和彦
- 西蓮院 檀契 織田大和彦

- 真蔵院 左側
- 惠生院
- 五坊寂靜院

- 庫蔵院 檀契 小出信濃彦
- 蓮花定院 檀契 真田彦
- 正法院

- 金光院 檀契 奥州三春彦
- 不動堂 金輪塔の 本尊不動明王 行勝上人の作

八條女院の御願不因行勝上人の創る所なり源頼朝卿  
 莊園若干と寄附し燈并と云ふ事あり古記に云ふ  
 の儀あり各巧思を以て造りし堂と造りしを合する  
 四隅各異なり

- 鐘堂 河内國教弘寺云
- 心字池 大師御願し又行勝上人創る事あり

- 福蔵院
- 五之室谷 壇場の東北四丁許あり上の谷の室の字に寺五箇あり

五之室谷



○大徳院 奉尊十一面觀音高祖大師の作なり 軍荼利明王高祖所持念

内佛阿弥陀如來安河

御宮後の山 御靈屋同所の美巖毛 御先祖堂公儀御代々

御位牌堂諸侯方の靈 銅造涅槃像御靈屋の庭 御殿屋敷

寛永年中 御宮御靈屋を外も建立なり又御

軟供の領地二百石を附し又年中の祭祀御法會

等嚴重なり

□大師堂 大塔と去り事五丁計 奉尊高祖大師

○高祖院 檀契 黒田豊前侯 水府中山大夫 康徳院 檀契 間部侯 畠山家

○三學院 祥宮院 眞藏院 万照院

○六町院 明王院

□極樂堂除厄大師 大師手懸

大師大峯小運歩しなすい〜と群生除厄の為 早二歳の容と

自造り吉野川の流小投下るふ像奉國學文路村の川底小

止り好いぬ夫より川面小夜靈光と現げ 村人發と異

を光如と尋子 素ふのる像と得り即為小堂と創

〜尊崇守或時我と野山へ移 べ〜との夢の告と任せ

村人護送〜奉ふこの堂前ふり〜俄然と〜と郭と

〜因り此堂小納め奉〜んと〜奇〜〜原より堂中小

〜と大師御作の丈六弥陀の像忽光と放〜西天小

飛去〜人是ふ〜衆人薩隆の見不可思議カ〜と感歎

〜此尊像と永く此堂の本尊と〜奉〜〜後靈驗日

小著〜〜と〜と〜珠更除厄と初〜〜應御音の如〜仍〜厄除

□首途辨財天大師の

大徳院



大師入唐のとき海陸無難のころ小作のまじり尊像の  
 六の因縁旅行する人擁護と祈る必感應ありのふ  
 首途弁財天とて

○照明院 檀契 尼寺疾  
 ○金剛院 檀契 吉田疾 高寺疾  
 府内疾 大里喜疾

○正覺院 檀契 松平右近將監疾  
 ○覺證院 檀契 大久保疾  
 ○常樂院

○峻徳院 檀契 井伊疾  
 ○慈眼院

○雲光院 檀契 井伊疾

○寶蓮院 檀契 井伊疾  
 ○密藏院  
 ○快專院

多神山若れ下までびびるるを其のふらりと 放 鵬 子

○寂靜院 ○來迎院 ○南藏院 ○歡喜院  
 ○持寶院 ○西明院 ○彌勒院 ○東光院  
 ○東室院 ○高樹院 ○福智院 ○南光院  
 ○淨寶院 ○珠寶院 ○明光院 ○妙福院  
 ○成蓮院 ○威藏院 ○福嚴院

○光臺院 高野御室 本尊阿弥陀如來 觀世音菩薩勢至聖母の二  
 堂安置奉 多宝塔 庫裏の後に岡あり 白河法皇の御陵の御代々の陵あり 寺中

故持明院の法皇れ御子高野の御室とて御坐す  
 隱岐の御所より梵字と御自筆の御逆修と思は  
 四十八日御供養ありて進給りて御供  
 聖覺法印の野參畫の便宜なりて二  
 十余座供養ありて中ふふ三座耳目を説法





○理性院 ○全光院 檀契 長洲吉川 ○曼荼羅院

○明星院 ○雨宝院 ○幸福院 檀契 林肥後侯

□千手観音堂 大塔とあり 本尊千手観音 眼士 不動明王 毘沙門天 普賢大師作

此地壇場の鬼門不當故小大師伽藍擁護のため弘仁十

年小彫鏤をす六丈六立像の千手観音なり此像廢

後大治年間蓮意上人再度を造る後嘉禎年中化千

上人二丈四尺の尊容と改造とをす正保四年の冬上

小衝く御頭とを奉る今猶堂裡小あり近來置く所の

尊像は何人の改造せし事とをす

□萬日堂 千手堂の 側あり

寛平年間一異僧庵とこの地小結び一あ日の間一刀三禮

く大師の尊像を携へ一々大師影現顧盼して曰くあ日の

造功勤く異僧愕として起拜する像も又た方

と顧る人今ふる像と改めせり

○大善院 ○林松院

□青面金剛堂不詳

□熊野權現社建治年間一上人

○觀性院 ○密花院 ○長壽院

□合幹不動堂千手堂の根方一丁許

○大師當山鬼門保護の爲創とす所なり曾て本堂と作らん

とて應ふ所の尊とす作らばと思ひ惑ひて春日明神に祈求

しよひくまが師が憶念する所の尊像半身と作らば我もす

半身と作らばと告う大師即この尊と造らば合す

宛一手と出らばと告う大師即この尊と造らば合す

尊像一軀あり由來詳

□秘井不動堂の

玉川の水源とい傳ふ人得くこふ觸と必ぬし

○高杉院 ○真光院 ○般若院

○西方院 檀契岡部彦 ○正觀院 ○真善院

○德藏院 檀契櫻樹院 ○南性院 ○明福院

○西生院 檀契木下彦 ○本覺院 檀契加藤彦 稲葉彦

○南藏院 檀契一柳彦 ○上智院 檀契市橋彦 細川彦

□天満宮國城院の南方あり往還

相傳ふ天曆年間雅真上人一山の火災と壓んぐるめ勸請

一奉す所かりて後一遍上人神の天夢と蒙るる也

小卓湯

○定光院 ○福生院 ○德善院 檀契小笠原彦 内藤彦 和彦

○金剛院 ○深王院 ○普門院 ○曼荼羅院

○金剛頂院 ○寂靜院

□ 千手院橋 千手院谷より  
小田原谷小瀬と

紀伊國名所圖會三編卷之五高野山之部中終

